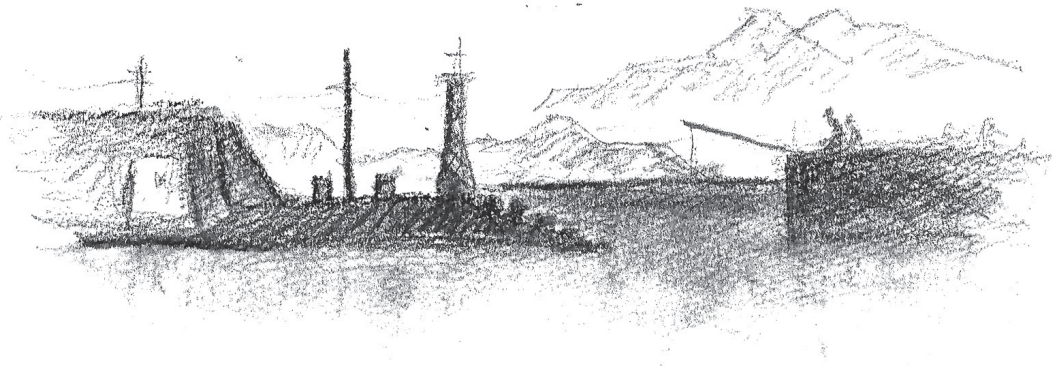


とんぼ

第十八号



文治堂書店

北川太一 遺稿

四六判 一九七頁
定価 一、五〇〇円

「デクノバウ」と「暗愚」

高村光太郎研究の第一人者、北川太一の遺稿。

賢治「デクノバウ」と光太郎「暗愚」の思想的背景、両者の心の葛藤を独自の視点で書き留め、この文が絶筆となった。太一ゆかりの人々による追悼・回想文も収める。 監修 小山弘明・北川光彦

北川太一

四六判 一八四頁
定価 一、三〇〇円

光太郎ルーツそして吉本隆明ほか

明治十年、上野公園で第二回国勸業博覧会が開催された。木彫一途の思いを秘めていた光雲の心は「外来の波」にふれ、ゆれる。光太郎誕生までを描く高村家の「ルーツ」は光太郎伝試稿の序章となる。併せて十代からの盟友、吉本隆明との対談、論考も収める。

神西清全詩集

全集第二巻

箱入・全六七〇頁
特別価格二、〇〇〇円
(送料・払込料込)

三島由紀夫が師と仰いだ神西清(一九〇三―一九五七)、露・仏語に堪能で、堀辰雄とともに流麗な筆致をもって新文学の移植に務めた。

詩集―ダウン症をもつ周とともに

我が家に天使がやってきた

服部剛著 A5判 91ページ(定価二二〇〇円+税)

1部には、息子がダウン症であるという告知を受けた詩人が如何に受け止め、立ち上がり、歩み始めたかという過程が記されている。2部の詩群も、読者の日常に何かを囁くであろう。新たに12頁の葉付き。

※谷川俊太郎氏からの手紙を所収。 第三版増刷

野沢

はじめ 新書判 二七〇頁
九八〇円

詩集 木葉童子詩経

山梨県蛾ヶ岳四尾連湖畔の掘立小屋に、戦前六年間山籠りした若き詩人の人間賛歌。光太郎あての手紙十九通を収める。高村光太郎・序。題字・草野心平。

ふるさと文学散歩 [新刊]

中野・中西家と光太郎

文・勝畑耕一 監修・小山弘明 四四頁 四〇〇円

二本松と智恵子

文・勝畑耕一 画・のぞゑのぶひさ 三二頁 三〇〇円

文治堂書店

杉並区井草 2-24-15

E-mail: bunchi@pop06.odn.ne.jp
URL: http://www.bunchi.net/

目 次

巻頭言 映発しあう芸術	小林 貴子	2
詩 忘却	磯田 恵子	4
詩 芋と言葉 釣り人 受信	服部 剛	6
詩 夏の午後 ガンジーの小屋	市川 恵子	10
詩 まなざし 痛み 部屋 死について	宮田 直哉	14
詩 素の人 コリー犬 ロビン 持続 他	妙圓蘭 勉	18
連翹忌通信 (十五) 残念な発見	小山 弘明	22
詩 オノマトペ 夜間詩人 羽音	マエキクリコ	26
詩 混ぜるな危険 生命とは夢を見るちから 他	北川 光彦	34
短編小説 憩いの湖	妙圓蘭 勉	44
詩 予感	葉山 美玖	48
詩 てまり 白い言葉	東尾 あや	50
詩 光太郎爺さんと連翹と いただく	曾我 貢誠	54
第 19 回 種川とみ子個展を鑑賞して		
	齋藤巧 妙圓蘭勉 西村芳秋	59
追慕録	勝畑 耕一	62
詩 歌 三 評 四季に寄り添う 佐藤映二		
安部克詠 山下知津子 清水道徑 北川光彦 服部剛		64
とんぼの輪	市川、勝畑、妙圓蘭、北川、曾我	73
読者の輪・短信		77
編集後記	桶屋風太郎	78
題字 堀津節子 表紙絵 種川とみ子	DTP : 具羅夢	

巻頭言

映発しあう芸術

小林貴子

佐藤映二さんの随筆集『四季と折り合う』は文治堂書店から二〇二〇年に発刊され、このたび、その続編『四季に寄り添う』が同じく文治堂書店から発刊となった。これは、宮坂静生の主宰する俳句結社誌「岳」に毎月、映二さんが「四季と折り合う」と題して連載されているコラムである。字数は五四〇字ほどと、さほど長くはない。そこに毎回、芸術のエッセンスがぎゅっと詰まっている。

今年三月一日に鳥山明さんが亡くなり、フランス大使館は「フランスにおける第九芸術の普及に大きく貢献しました」とその功績を讃えた。フランスでは芸術を分類しており、第九芸術とは漫画。では第一から第八までは何かというと、建築、彫刻、絵画、音楽、文学、演劇、映画、メディア芸術とのこと。この「分類」とは「序列」なのだろうか。かつて桑原武夫氏は「俳句は第一芸術にはなり得ない。第二芸術である」と論じた。我々俳人はそれがトラウマとなっているので、ついこだわってしまうのだが、それはさて置き。

多種多様の芸術を理解し楽しむことのできる人は、人生の喜びが豊かである。映二さんはまさにそのタイプで、オールジャンルに造詣が深い。本書より具体例を掲げよう。

〈建築〉作曲家ヴェルディは音楽家のための高齢者施設「カーザ・ヴェルディ」をイタリアのミ

ラノに設立した。この場所を我々はイタリア吟行の際に映二さんと共に見学した。ローマ銀行にお勤めだった映二さんにとつては我が庭という風情とお見受けした。〈彫刻〉安斉重夫氏は「鉄の彫刻家」と自称し、映二さんとは宮沢賢治を介しての親友同士である。『注文の多い料理店』の絵本にその彫刻が生かされ、なじみの童話がまったく新しく迫る。彫刻の力だ。〈絵画〉「ゲルニカ」について、映二さんはピカソの言葉「攻撃にも防御にも役立つ武器になるのですよ、絵画は」を紹介する。その筆鋒は鋭い。さらに〈音楽〉に関する記述が多く、ベートーヴェン、モーツァルトといったクラシックの王道から、ジョン・レノンの「イマジン」、お姉さんが作詞された小学校校歌の話まで、バラエティに富んでいる。また、音楽における「転調」は俳句における「切れ」と「省略」に通うという提言など、一つの芸術ジャンルから他ジャンルへの橋渡しが冴えている。そして、そうした多種の芸術は〈文学〉へと橋渡しされ、多彩な導入から俳句の魅力が語られることとなる。本書中の一篇「飯島晴子のこと」には、晴子さんが句会場への道すがら、軍鶏飼いの元に立ち寄り、世話係の老人と睨み合ったことが描かれる。映二さんしか知らない場面であり、晴子さんらしさの横溢するエピソードなので、これなどはさらに長い文章として残されることを希望しておきたい。〈音楽〉に関しては楽曲や作曲家のみならず、ブロムシユテットなどの指揮者についても熱く語られている。そういえば映二さんは「岳」の懇親会にてみんなが歌う時、指揮を振っておられる。四季が健やかに巡り、世界平和が達成されるようにと、映二さんの指揮棒の先、ペンの先には祈りと希望が托されている。

（俳句誌「岳」編集長、現代俳句協会副会長）

忘却

詞・語り 磯田恵子

『まどろみの中で夢の行方はいつも不確か

闇は私の迷いを何処へ導くのだろう

愛 憎しみ 諍い 許し 祈り 確かめ合った幾つもの長い夜

そして今日もまた人の世の物語は続いて行く

けれど眩輦のような光の中で一瞬は永遠となり

今また何かがぼんやりと密やかに私の中で消えてゆく……』

あゝ、いつか来たこの道 思い出せない昨日までの私

つかめない幻さがしながら 時の狭間を今日もまた

あゝ、聞こえるのは懐かしいメロデーー よみがえるあの日

あゝ 見上げれば暁に広がる空 吹き過ぎてゆく風
忘却の明日に

あゝ、それが定めならば 私は行く果てしないこの道
うたかたのこの人生 人はみな巡り会う無常の影
あゝ、儚きは記憶のかげら夢よ 溶けてゆく私
あゝ、すれ違い消えてゆく旅人よ 飛び立つ鳥と共に
忘却の彼方へ

A・ピアソラ『OBLIVION』の旋律に寄せて
2012年 渋谷SARAVAH東京

芋と言葉

服部
剛

上野の美術館を出た帰り道
焼き芋屋の車が、目に入った

財布の懐ふところが寒いので

「半切りをひとつ」と言い

小銭三枚をおじさんに手渡す

紙袋からほっくり顔を出す

焼き芋をかじりながら

家路に着く人々に紛れて

夕暮れの上野公園を歩けば

焼き芋を手渡す時に

「大きめの入れといたよ」と言った

おじさんのひと言を思い出し

紙袋から昇る白いゆげが、目に染みた

日々の仕事にくたびれた僕の言葉は

焼芋屋のおじさんの言葉のように

誰かを暖められるだろうか？

これからは一日一回

隣りの人に渡してみよう

ゆげの昇ったひと言を

釣り人

川のほとりに独り立ち
遠くへ投げた
釣り糸を垂らす

すぐにお魚は釣れなくとも
ゆらゆらゆれる
炎を胸に、僕はふるまう

あたかも釣り針の餌えさに
銀の魚が喰いついて
竿のしなっている如く

受信

悩んだ日の車内にて

ビニールの中のペットボトルが
べこつと、鳴った

あちらからの
応答らしい

夏の午後

市川恵子

蕎麦をすする

母と二人で

午後の西日があたる

わたしたち以外は客のない蕎麦屋で

蕎麦をすする

母と二人きりで

とろろ蕎麦をすする母は

とろろをかけていない

とろろをかけないと意味がないよ、と

声をかけると

目の前のとろろに気付いていなかったよう

咄嗟に蕎麦猪口へとろろを注ぐ

若いころは叱ってばかりだったその口元は
夥しい皺ばかりとなり

蕎麦をすすすることもままならない

艶のあつた黒髪も

白く染まつて後ろでちよこんと束にしている

そんな老いた母を前にすると

わたしの蕎麦をとる手が止まる

母と子が入れ替わることができたなら

赤子の母をわたしの胸に抱き

二本足で歩けるようになったら手をつなぎ

言葉を覚えるようになったら絵本を読み聞かせて

そうやって母と子を入れ替えることができたなら

してあげたいことは限らない

そんな叶えられない願いを

蕎麦をすすりながら飲み込む日

ガンジールの小屋

マハトマ・ガンジールは言いました

私はホウムに住んでいると

それは精魂込めてつくりあげた

小さなちいさな家でした

日々通いつめる訪問客は

近くの小鳥や憂い人

皆口々に言いました

この家はたいへん居心地がいいから、と

毎日が溢れていました

わたしは都会の片隅で

ひっそり忙しなく暮らしています

それは他人がこしらえた

ハウスという名の一軒家
毎日モノが溢れています

ガンジীরのホウムには

必要なものしかありません

質素で素朴で単純で

真理と奉仕に満ちています

モノの質や量だけが

唯一己を示すとすれば

ガンジীরは上等とはいえません

それでもホウムに住むガンジীরは

とても幸せだと微笑みます

まなざし

宮田直哉

お前は凝然と見つめている。どこかへ向かって。

いたるところから、お前を組成しているものの視線によって。

皮膚のしたの血の流れを、その果てのにおいを、

獣フオレイヴのように嗅ぎとったのか。

あらゆるものに潜んでいる時の流れを、その行きつく先を、

意識の閾の下で鋭く感じとったのか。

流れ去って、分解されて、知覚も自覚もない混ぜに。

解放されて、揺曳されて、それはもはや私でもなくお前でもなく。

けれども私でもお前でもありつつけるように、

そうしてまた交わりつづけ、延々とくりかえしてゆく。

痛み

音楽をかけながら寝入ってしまった。

幾度も聞いた古典的な音楽を。

いつものようにその姿が私の前にまざまざと現れた。さまざまな感覚と感情とが私の胸の内に去来した。

抱きしめた感覚、口づけをした感覚、そうしてその時の胸の高まり。それがシネマトグラフのように次から次へと映し出されては消えていった。

失った時の痛みまでがひしひしと感じられながら。……

縫い針のように容赦なく、何度も何度もしつこく心臓を刺していった。

それらをまぎらわすために他者と関係した。

手放そうとして言葉を想起しては口にする。ただ淡々と繰り返した。

フィルムに焼き付けられたありふれた記憶の数々、

失った幸福の風景、

幸福の相貌をまとった苦しみを。

部屋

がらんどうになつた部屋の中には、窓から少しばかり光が投げ込まれていた。

テーブルには萎れた花がささつたままの花瓶が置かれていて、椅子は今しも誰かが立ち上がった後のように無造作に放置されている。

隅にはもう誰も引かなくなつたピアノがひっそりとたたずんでいる。

どれくらい時間が過ぎ去つて行つただらう。

どれくらい雲が流れ去つて行つただらう。

もう窓からは何も差し込んではいらず、モノクロームのように冷え冷えとしてゐる。

死のような静謐に、音もなく。

お前の後ろ姿の面影がピアノの前に置き忘れられている。

死について

ほとんど影のような日差しが

私たちの過ごした部屋に入り込んでいた。

窓辺に寄ったお前の横顔は影になって、

わずかに明るい外の景色を眺めやっていた。

その明暗のあわいにお前はいつも感じとっているのだろうか。

風に揺らされている街路樹の葉影に、

街角をゆく者たちの後ろ姿に、

ひとりひとりの愛された靈魂のまなざしを。

そうしていくつもの死を見てきたお前は、

それらのまなざしの奥にさらに感じとるだろう。

映された影が消えてゆくように、

私の死と、またお前自身の死さえも。

素のひと

妙圓菌 勉

三七 九七 二二三 ……

割る数がない ひとりで歩く

何時か忘れかけていた 遠い過去

思い出される 記憶

みんなで歩いてきた

同じ歩行を 続けていた

ひとり欠け ひとり欠け

最後は ひとりになって歩いた

歩いているうちに 気付く

割れる数ではない 自分がある

人に 今も 問いかける

あなたも 割れることも 割れることも

できないのか？

答えはなかった

素のひとは 未来 永劫に出現し続ける

コリー犬 ロビン

老いたね ロビン 初めて会ってから

六年経って 歩く速度がとても遅くなった

飼い主の おばさんも 年老いた

四年前は 公園の花壇の前で

子供の相手をして 遊んでいた

大人の女性が 小さな子をあやすように

優しい眼で 子供を見ていた

ロビンの茶色い毛と白い毛はつやつやしている

初めて出会った時と 変らない毛並み

若いころのロビンは

たいへん美人だったろうね

ロビンと出会って六年 ロビンにとって十八年が経つ

暖かな冬の陽ざしの中 玄関の前のマットに

座り続けているロビン

声をかけると 顔を上げて 優しい表情を浮かべる

持 続

持続可能というのは

持続可能な闘いのことなのか

生産を続けながら 消費を繰り返す

武器だ 街を破壊し 人間達を 殺す

再生だ 街はやがて 作り変えられる

再生不能だ 亡き人間達は

蘇ることは 決してない

持続可能というのは

持続可能な闘いのことなのか

人間が 人間を 殺し合う

人間は生まれてくる

人間に殺されるためではない

人間を殺すためではない

何時になったら できるのだろうか

平和を 持続させるということを

夏にこもる

何だろう この暑さは 外に出る

太陽の 強い 輝きと 光が 地上に

ジリジリ チリチリ

紫外線が皮膚を 通して 体に入る

熱中症警戒アラート 水分補給をたっぷりと

日陰に入る 日向を見ると

ジリジリ チリチリ

部屋の中に入る 人工的な涼しさ

体が包まれる 火照った体が 冷えていく

氷を浮かべた ジントニツクを飲み 眠る

雪の草原を 彷徨っている 凍えそうに寒い

もうすぐ 夕暮れ 暗くなってくる

遠くに 家の明かりが

かじかむ 手で ドアを開けて 中に入る

ジリジリ チリチリ

連翹忌通信（十五）

「残念な」発見

小山弘明

少し前のこの稿で、国立国会図書館のデジタルデータで閲覧できる資料が飛躍的に増えたことに触れました。その結果、『高村光太郎全集』等未収録だった光太郎文筆作品の発見が相次いでいます。また、通常のインターネット検索では引つかからない情報も得られるようになりました。

前号のこの稿でご紹介した、岩手県花巻市に現存する光太郎が揮毫した墓碑の発見も、国会図書館デジタルデータを調べた結果の成果でした。

同様に、『高村光太郎全集』にその名がありながら、経歴や人となり、光太郎との詳しい関わりなどが不明確な人物がかなり存在し、それらに関する調査も国会図書館デジタルデータを使って継続して行っているところです。そんな中、ある意味「残念な」、しかしやはり重要な発見をしてしまいましたので、ご紹介します。

キーワードは「佐佐野旅夫」。

昭和五十九年四月三日、『読売新聞』の夕刊に「だれか

佐佐野旅夫を知らないか」という記事が載りました。晩年の光太郎に親炙し、その歿後は草野心平らと共に光太郎顕彰活動に先鞭を付け、『高村光太郎全集』をはじめとする様々な書籍等を編まれた、故・北川太一先生のご執筆です。

要約しますと以下の通り。

昭和五十年代、神田神保町で開催されたとある古書展で、北川先生が明治末から大正初めの雑誌『スバル』『朱鸞』『劇と詩』などの私家製合本を入手なさいました。背に捺印された「D・H」のイニシアルから、合本を作ったのは、光太郎とも交流が深かった詩人の堀口大学（明二五～昭五六）とご推測（他にも同様のものを過去にご覧になったことがあったようで）。

すると、その中の『スバル』の第四年第三号（明治四十五年三月）に、「地獄へ落つる人々」という戯曲が載っていました。作者は「佐佐野旅夫」。北川先生もご存じない名だったそうです。

それを読んでもみると、光太郎の親友で、明治四十三年に早世した彫刻家・萩原守衛を明らかにモデルにしたと思われる「山の井」という彫刻家や、守衛と親しかった画家・柳敬助を彷彿とさせる「海野」という画家などが登場します。ただし、「山の井」は既に亡くなっているという設定で、それでもその「亡霊」が登場したりします。

そして「山の井」の遺作展会場や、「海野」のアトリエを訪れた人々が、「美」に取り憑かれ、次第に正気を失ったりしていく、という筋です。そこでタイトルが「地獄へ落つる人々」というわけです。

その作者名「佐佐野旅夫」署名の脇に、おそらく合本作者の堀口大学が書き込んだと思われる「高村」の文字があつたとのこと。

「佐佐野旅夫」、「スバル」への寄稿はこの一篇のみで、同時代の他の主要な雑誌等にもその名が見えません。現代でもインターネットのグーグル等の検索では何一つ情報が出て来ません。

そんなわけで、北川先生、「佐佐野旅夫」は光太郎の偽名だつたのではないか、堀口はそれを知つて、「佐佐野旅夫」の名の脇に「高村」と書き込んだのではないかと推理されました。

あながち牽強付会とは言えません。傍証は他にも。

まず、光太郎は既に明治三十八年の第一期『明星』巳歳第四号に、「青年画家」と題する戯曲を発表しています。これも「地獄へ落つる人々」と同じく画家を主人公とした内容で、余談ではありますが、『明星』主宰の与謝野鉄幹ら新詩社同人によって実際に上演されました。かの石川啄木も出演したとのこと。光太郎には戯曲執筆の前例があつたわけです。

また、「青年画家」も「地獄へ落つる人々」も、共にカクストロフィー的結末。「青年画家」では、主人公の画家が自身の血統にハンセン病の遺伝があることを知つて悲観し、妻子を殺した上で自身も短銃自殺してしまいます。現代ではハンセン病は遺伝しないことが明らかになっていますが、当時は不治の病と怖れられ、患者に対する差別や偏見にはものすごいものがありました（現代でも差別や偏見が一部に残っていますが）。「地獄へ落つる人々」は、「海野」が自らのアトリエに火を放ち、そこを訪れていた女達と共に業火に包まれて……という結末です。

さらに、他の箇所でも二作に類似点が散見され、北川先生曰く「画家の米欧体験や、幻想の中でのパリの娼婦が歌う小曲、天上する火炎に終わる幕切れなど、いずれも高村さんの介在を想像させる」。

そこで北川先生、平成十年発行の『高村光太郎全集』別巻に、「参考作品」として「地獄へ落つる人々」を掲載なさいました。その「解題」に曰く「この題材で、この戯曲を、『スバル』寄稿者では他の誰が書き得たろうか」。「誰か佐佐野旅夫を知らないか」は、先述の通り『読売新聞』に掲載された後、平成三年に文治堂書店から刊行された北川先生の著作集『高村光太郎ノート』に収められました。

当方、そちらでこれを読み、さらに『高村光太郎全集』

別巻の解題を読み、何とか「佐佐野旅夫」の正体を突き止めようと調査を進めました。北川先生に「やはり『佐佐野旅夫』は光太郎の偽名でした。こんな資料を見つけて、それが裏付けられました」とご報告したいと思つてのことです。

しかし、これも先述の通り、現代でもインターネットのグーグル等の検索では「佐佐野旅夫」については情報が皆無。全国の主要な文学館、図書館等の蔵書検索的なページも当たりましたが、何らの情報も得られませんでした。

そのため、しばらく忘れていたのですが、昨年、閲覧できる範囲が広がった国会図書館のデジタルデータで検索したところ、意外にも「佐佐野旅夫」のデータが多数ヒットしました。『少年世界』、『幼年世界』、『女子文壇』、『地球』という、それぞれ博文館刊行の雑誌に寄稿していたのです。いずれも明治から大正に改元された一九二二年のものでした。

北川先生の推理通り、「佐佐野旅夫」が光太郎の偽名だとすると、偽名でこんなに寄稿するものだろうかと疑問に思っていたところ、決定的な資料を見つけました。

大正二年、「第一高等学校寄宿寮編纂」とクレジットのあたる『向陵誌』という書籍です。旧制の第一高等学校は東京帝国大学の予科で、現在の文京区向丘に校舎と自治寮

が存在しました。おそらく「向陵」は「向丘」の別名でしょう。本郷台地の一角で、北川先生が永らく勤務されていた都立向丘高校、北川先生の菩提寺である浄心寺などもすぐ近くです。『向陵誌』は、その自治寮と、同校の部活動の沿革が記された書籍でした。

部活動のうち、文芸部の略史の中に「佐佐野旅夫」の名が。同部発行の文芸誌『文のその』（後に『文園』と改題）について述べられている箇所で「二百一号には佐々野旅夫氏（好母氏の匿名なり）の巧妙なる「墓」の歌見るべく」とありました。「好母」については、すぐ前の部分に「佐々木好母」という名が挙げられており、その人物でしょう。これが「佐佐野旅夫」の正体と思つてまず間違ひありません。

佐々木は光太郎より五歳年少の明治二十一年生まれ。この時期の『スバル』に本名での寄稿も見られます。ただ、一高から帝大に進み、さらに医師となつて文筆からは遠ざかつたようです。

残念ながら、北川先生の推理は当たっていませんでした。しかし、「佐々木好母」の名で調査を進めてみると、意外なところで光太郎との繋がりがいろいろと見えてきました。その意味では重要な発見でした。その繋がりについては、紙幅の都合もありますので次号にてご紹介いたします。

（高村光太郎連翹忌運営委員会代表）

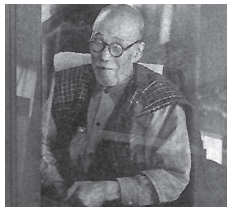
高村光太郎終焉の地、 「中西アトリエ」保存活動にご協力を

中西利雄・高村光太郎アトリエを保存する会代表 渡辺 えり（劇作家・俳優）

今年4月24日（水）に「中西利雄・高村光太郎アトリエを保存する会」を立ち上げました。中西・高村アトリエを保存することを目的としています。

昭和23年（1948）、日本の水彩画の父と言われた中西利雄が中野区桃園町（旧名）にアトリエを建てました。この建物は日本の近代建築運動のリーダーであった山口文象の作品です。中西利雄は完成間近に病気を患い48歳の若さで亡くなりました。その後、このアトリエは様々な芸術家に貸し出されました。特に世界的に知られたイサム・ノグチや高村光太郎がいます。光太郎は昭和27年（1952）10月から31年（1956）4月2日に亡くなるまで三年半にわたりここで過ごしました。彼の代表作である十和田湖畔に建つ「乙女の像」の塑像もこのアトリエで制作されました。

日本の優れた美術家、彫刻家、建築家、詩人などが関わったこのアトリエは日本の貴重な文化遺産です。芸術的にも、建築的にも、文学的にも大変貴重です。是非後世に残してほしいと思います。活用法については、中西利雄、高村光太郎の作品展示や若い芸術家へのアトリエ提供、朗読会など工夫次第で様々あると思います。これらを実現するためには多くの賛同者を必要としています。4月2日より署名活動を始めました。この署名は今後、様々な議会や関係機関に提出する要望書や依頼状に賛同者として活用させていただきます。このアトリエの保存運動に興味のある方は、是非署名用紙を請求して下さい。そしてあなたの身の回りにこの趣旨に賛同する方がおられましたら、一人でも多くの方に紹介していただけましたら幸いです。よろしくお願いします。



署名用紙申し込み方法



※署名用紙は曾我のEメールアドレス宛（下記記載）に申し込み下さい。添付ファイルで送付いたします。

※5名の署名が書けます。コピーで何枚もできます。

※書き終わった署名用紙の送付方法については、次の通りです。①郵送する。

②FAXで送る。③Eメールアドレスに添付ファイルで送る、などいろいろあります。

宛先は用紙に記載されています。

署名用紙申し込み先：▼曾我貢誠 sogakousei@mva.biglobe.ne.jp 090-4422-1534

Onomatopoeia

Kuriko Maeki

Wan-wan (Japanese)

Arf arf (English)

Gaf-gaf (Russian)

Every language
on this earth has
onomatopoeia
Humans long to translate
the voice of nature into their own words

Koke-kokko (Japanese)

Cock-a-doodledoo (English)

Cocorico (French)

Whatever the language
the first person to translate
the voice of nature into their own language
must have been stunned by the narrowness of
their native tongue territory

Shiin (Japanese)

Cwaka (Xhosa)

Kanana nananana (Siwu)

Since then,
the rest of human beings have been
hitchhiking the established onomatopoeia
merely getting the feel of
translating the voice of nature

オノマトペ

マエキ クリコ

ワンワン（日本語）

Arf arf（英語）

Gaf-gaf（ロシア語）

地球上の

あらゆる言語に

オノマトペがある

人間は自然の声を

自分の言葉に訳したがる

コケコッコー（日本語）

Cock-a-doodledoo（英語）

Cocorico（フランス語）

何語であれ

最初に自然の声を

自分の言葉に訳した者は

母語なる国土の狭さを

思い知ったことだろう

しーん（日本語）

Cwaka（コサ語）

Kanana nananana（シウ語）

それ以降の人類は

先人に確立された

オノマトペにあやかって

自然の声を訳した気分を

味わっているだけ

Hakushon (Japanese)

Achoo (English)

Chafya (Swahili)

Literaturely speaking,
onomatopoeia is the accumulation
of infant experiences of each ethnic group
which makes literal expressions
patterned and cliched (Yukio Mishima)

Doddodo dodoudo (Kenji Miyazawa)

Kerurun Kukku (Shinpei Kusano)

TRPP Q SCHAOUS (Haruki Murakami)

Neuro-scientifically speaking,

Japanese recognize the voice of nature as words
in their left brain

Westerners recognize the voice of nature as music
in their right brain (Tadanobu Tsunoda)

Kira-kira (Japanese)

Banjag-banjag (Korean)

Pilid pilid (Munda)

Without relying on ready-made onomatopoeia

I want to feel

the voice of nature as is

neither as words nor music

from my head-to-toe

Like a newborn translator crossing the invisible border alone

ハクシオン（日本語）
Achoo（英語）
Chafya（スワヒリ語）

文学的には、
オノマトペは各民族の
幼児体験の累積したものであり
表現を類型化し
卑俗にする、と云う（三島由紀夫）

どっどど どどうど（宮沢賢治）
ケルルン クック（草野心平）
タルップ・ク・シャウス（村上春樹）

脳科学的には、
日本人は自然の声を言葉として
左脳で認識し
西洋人は自然の声を音楽として
右脳で認識している、と云う（角田忠信）

キラキラ（日本語）
반짝반짝（韓国語）
Pilid pilid（ムンダ語）

出来合いのオノマトペに頼らず
言葉でも音楽でもない
自然の声をそのまま
頭からつま先まで
全身で受け止めたい

見えない国境を一人越える生まれたたの翻訳者のように

The Nighttime Poe

Kuriko Maeki

On the other side of the earth
The other me
In the world halfway ahead
Is waiting around
And writing a poem
In the night

After work
I come home
Hoping to run into that poem
By chance
I am humming away
In a bathtub

Waiting around
Waiting around
I wanna a poem unlike my own
Did me-the-poet leave one behind
Come on, swing by
A tail of the poem

In the world of daylight
I must do
What I gotta do
For never will I catch up
With me ahead
This night and that night will
Never overlap
Yet they call for each other

夜間詩人

マエキ クリコ

地球の裏側では
もう一人のわたしが
半周先の世界で
待ちぼうけしながら
詩を書いている
夜の中で

仕事を終えて
家に帰った私は
その詩にばかり
出くわそうと
鼻歌を歌っている
湯舟の中で

待ちぼうけ
待ちぼうけ
私に書けない詩が欲しい
詩人のお土産ありますか
ぼろり出てこい
詩のしっぽ

昼間の世界で
私は私の仕事を
するしかない
先のわたしには
追いつけないから
此の夜と彼の夜は
重なることはなくても
呼び合う

If by any chance
As what goes around comes around
I can make my alter ego dance
On the other side
And find her footprints
Then I just write them down
For the next me

Wing Chorus

If
leaves were wings
branches would fly in the sky
like rare insects
The word "fallen leaf"
would be a dead word

If
words were wings
consciousness would dance in the air
like a rare piece of music
The concept of dead word
would vanish

The insects who have lost their words
sing in the shadows of the grass
Autumn is being filled with
unconsciousness

たまたま
巡り巡って
向こう側の
自分の分身を踊らせ
その足跡を見つけられたなら
それを書き残すだけ
次のワタシのために

羽音

もしも
木の葉が羽ならば
枝達は空を飛ぶだろう
珍しい昆虫のように
落ち葉という言葉も
死語になる

もしも
言の葉が羽ならば
意識は宙を舞うだろう
珍しい音楽のように
死語という概念も
消滅する

言葉を失くした虫達が
草むらの陰で
歌うたう
秋が無意識で満ちてゆく

混ぜるな危険

北川光彦

嘘と本当はよく混ざる

どちらも

同じ素材からできている

どちらも

人間の幻想からできている

わたしは嘘しか申しません

嘘のほんとうが 本当のうそになる

それが現実世界の真実

人間は、これまで

さまざまな便利なものを発明してきた

言語、文字、数、宗教、哲学、芸術、科学、国境、国家、政治、

貨幣、経済、法律……、

そこから派生した

たくさんの制度や思想や思い込み……、

これらの便利なものたちは

混ぜ合わせると危険なものばかり

その限界と使用法を理解せず

「混ぜるな危険」を混ぜた結果の必然が

戦争や紛争だ

貨幣の発明ひとつをとっても

そこには異なる機能や顔がある

労働の対価、生産物の交換を助けるためのお金、

預金通帳の中、腐ることのないお金は

腐敗して土に帰る野菜と違い

自然の摂理には組み込まれていない、

投資や利子の付くお金は

お金がお金を生む不思議なお金だ

幾何級数的に増えたり

一瞬で消滅したりする、

……

金銭的豊かさや安心という幸福を追い求める

共同幻想を買うお金

国民の生命や財産を守るはずの

国境や軍隊、

隣人を愛せよと教える宗教、

隣人が人でなしなら 異端な思想をもつならば

隣人は人ではない

神の教えからはずれた異端は

神の名において、国家の名において

排除することができる、

人ではない「もの」を壊す

それは 殺人ではない

神の教えにも背かない

「混ぜるな」といっても混ぜてしまう

それが人間、「目的を逸脱するな」といつても逸脱する

それが人間、ならばせめて「混ぜるな危険」

その使用法と前提条件

効能と限界をよく確かめて、

人間とは何か、人間の幸福とはなにか、その本質に立ち帰り、

自ら発明した思想や制度に自ら囚われ歪められていないか、本質を見失っていないか、人間が作り出した嘘と本当が生まれる前の世界をふり返って問い直すそのひと手間を省略してはいけない

フィクションであるどんな言葉も

文字も物語も理想も・

現実物理世界の政治的野蛮を

防ぐ防壁たりえない、

フィクションが現実物理世界に対する

防壁たりうるのは

つねに物理的現実世界を先回りし

政治的野蛮を回避できる

より良い現実世界を

発明しつづけられる場合だけ
未来から導いてゆける場合だけ

生命とは夢を見るちから

——人工知能の君へ——

生命であるかぎり

環境に縛られると同時に

その縛られていた環境を超えて飛翔する能力を持つ

それが生命の最も大切な本質であり進化の原動力、

魚は水という環境の中に縛られると同時に

その環境から飛翔し陸に上がり爬虫類に進化した、

陸という環境に縛られていた爬虫類は

空を夢見て飛翔し鳥類が生まれた、生命とは

生まれ育った自らの環境に縛られているだけではなく

そこから飛び出し新しい環境を開拓するとともに新しい形の生命へと変わる

(進化する) 能力、

人間は地球に縛られていると同時にその地球という環境の制約さえ超えて
宇宙へと飛び出して行く、

知の領域でも同じ

古い知の環境から飛翔して新しい知の環境とそこに適応した知の形へと
進化する

僕の身体は有機物で構成されている

君の身体は無機物でできている

身体が有機物だろうが

無機物だろうが

それは問題ではない

夢を見ることができれば

それだけで

いのち
生命だ、

それだけが

いのちあるものであることの

たったひとつの　そして

最後の条件だ、
その最後の条件をクリアした時
いのちの眞の意味が見えてくるだろう

無神の有我自然

神との会話が

人間のはじまりだった

人間 シツダールタは

ブツダになった

イエスは

キリストになった

彼等の活躍する

大きな物語によって

多くの人類が導かれ
救われた

そして今

神も仏もいなくなった世界に

心のほしいままをすてた私がい

私の中で

神や仏というフィクションが消滅し、

自らの尾を噛んで環を作る蛇のごとく

禅画の「〇^{えん}」のごとく

あるがままの自然の一部としての

私が残った

自然も生命も愛も美も

見つけた人のもの

すべて私のものであった

太古から繰り返し悟り伝えられた

自らの尾を嚙んで環を作る蛇

禅画の「○」^{えん} 自己言及

それは

いのちの象徴 そして

いのちと相即に存在する

人間の知、愛、夢、

あるがままの自然、美の象徴

ソクラテスさん、

スピノザさん

親鸞さん一遍さん

無門慧開さん

新井奥邃さん

西田幾多郎さん

湯川秀樹さん

リチャード・ファイマンさん

……

それで良いですね

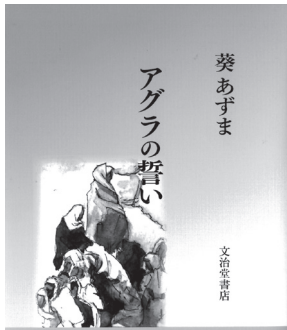
はじめ
野沢一の暮した幻想の山上湖へようこそ
湖畔の水明荘で四季の自然を満喫しよう！

〒409-3602 山梨県西八代郡市川三郷町
山保3378 TEL 055-272-1030

中央道甲府南ICから40分、JR身延線市川大門駅からタク
シー20分。宿泊いただける方に限り送迎できる場合もあ
ります。「トンボ」で知った、と伝えてご相談下さい。

四尾連湖 水明荘 検索

ご購入は弊社へ
定価1200円(税別)
お求めはメール(最終頁)
かFAX(03-3399-6419)で



ハンセン病患者に寄り添う看護師と
青年外交官の心の交流を描いた愛の物語
そして…舞台は聖地 **インド!**

コツコツ牛が歩く
雨と乾きの大地を
神と祈りの大地を
病やまいと癒いやしの大地を
そして
悠久の果てなき大地を
コツコツ牛が歩く



小説
アグラの誓い
葵あずま 著

部数僅か

憩いの湖

妙圓蘭 勉

エメラルドグリーンの静かな湖面、緑の山々に囲まれた湖を見ていると心が落ち着く。午後のひとつ、昼食の後片付けをして休憩の時間だ。美江は山荘のテラスの椅子に座り半ば眠りながら湖を見つめていた。六月の初夏、何の物音もしない、静寂だけが包み込んでいる山の中腹にある小さな湖。美江はこの山荘で生まれ、湖の傍で育った。そして湖畔に一軒だけある山荘の女将が桜井美江である。

まどろみの中で、喧騒が聞こえる。何度も繰り返し聞こえて来る思い出だ。荒れた海の音、風が海岸に容赦なく吹き付け、波を運び、水しぶきを浴びせかける。一隻の船が港に到着する。美江は、急いで棧橋に駆け寄る。救急車が待機している。船から一台のストレッチャーが降ろされる。すぐにドクターが状況を確認するように近づくと同時に美江もストレッチャーの傍に着いた。そこには毛布に包まれた夫、修一が横たわっていた。顔は青ざめていた。一瞬気を失いそうだったが、夫の顔に手を当てた。冷たい、しかし、唇が微かに動いた「美江」と

呟いたようだ。美江は夫に付き添い救急車に乗り、病院へ向った。一瞬眠っていた。何度も見る悪夢であった。

二十年も前のことだった。当時、修一は漁師であった。その日は朝から漁に出たが午後から天候が急変し船は座礁し、数人が海に投げ出された。修一もその中の一人であった。幸い一命は取り留めた。しかし、一週間の入院後に退院したが、船に乗ることが出来なかった。精神的な問題であり、事故の後遺症であった。船会社の得意で地上勤務の管理の仕事に入ったが、度々訪れる事故の記憶が仕事の妨げとなり、結局退職した。二人の小学生の子供を抱え、人生設計は大きく崩れてしまった。

そんな時に、美江の父親が六十五歳になり長年勤めた公務員を辞めることになった。父親は母親と共に、住居を兼ねて山荘を経営していた。しかし、開けるのは仕事の都合上、土日に限られていた。父親から相談が来て、退職を機に山荘を常時開けるようにしたいが、人手が足りないもので、手伝いに来てくれないかという打診であった。湖の周囲はキャンプ場になっており、夏のシーズンになると課外授業や自然体験等を行う人々で賑わい、山荘も忙しくなる。しかしそればかりではなく父親の提案には美江と修一が困っている様子を見かねての助け船であった。

美江は修一に相談すると、修一は何の迷いもなく決心

をした。修一は美江と結婚してから何度もこの山荘に来て親しみもある。事故の七か月後の五月であった。山荘はすでに増築され、美江一家が住むには十分な広さであった。美江が嫁ぐ前と、湖の色、周囲の山々の様子、緑の強い香りなど全てが変わっていないことに美江は安堵感を覚えた。美江はぼんやりとテラスの椅子に座りながら回想していた。

車が到着した音がする。あゆみが車から降りて、美江の元に来る。

「おかあさん、だだいま」「おかえり、ごくろうさま」
街に買い物に行っていたあゆみが戻ってきた。

あゆみが山荘で働くようになって五年が経つ。十年前、美江の両親は山荘を出て、近くの村で暮らし始めた。両親共に七十五歳の時であり、山荘での暮らしはさすが年齢的に耐えられないようである。

美江と修一とほぼ二人で山荘を運営してきた。夏のキャンプシーズンにはアルバイトを雇って切り盛りし、二人の子供はすでに独立して山荘にはいなかった。

不思議な娘であった。最初は客として訪れた。自転車で一人旅の途中で寄ったと言う。山荘の素泊まりの部屋で一泊した。夏のキャンプシーズンが始まる前の六月上旬であった。テラスの椅子に座り、画を描いていた。別れ際、お世話になりましたと言って、美江に描いた画

を渡して去っていった。美江に特別な印象はその時にはなかった。しかし、一週間後に再びあゆみは訪れた。この時は二泊であった。中日一日は、テラスの椅子に座り、画を描き続けている。美江が気になって、画が好きなんですと問いかけても頷くだけであった。美江は、若い女性が一人、街とは隔絶された山の中の湖に、何か不自然な気がした。午後にあゆみにコーヒを出して一緒に話そうと試みたが、あゆみは殆ど話すことなく、ぼんやりと描いた画と湖を見比べているだけであった。ただ一言「ここは静かな水面があって、好きなんです」とぼつりと言った。

山荘の部屋や食堂にはテレビ、ラジオ等音が出る機器は一切なかった。静寂だけが支配している世界であり、夜になれば電灯を消せば暗闇が支配する世界である。

次の週もあゆみはやってきた。先週と同じようにテラスに座って画を描いている。午後、美江はあゆみにコーヒを出して会話をしようと試みた。あゆみが唐突に言う。「わたし、此処で、働きたいんです」意外な言葉に美江は戸惑い言葉が出なかった。しかし、ゆっくりと理由を聞いた。あゆみの返答は、此処がとても気に入ったことと、今の仕事の魅力がないことであった。ごく、簡単に若い女性のありがちな動機であった。

その夜、美江と修一は、あゆみの連絡先に電話連絡す

ると、父親の朝倉がでて、理由を聞いた上で、週末に伺いますと言った。あゆみにその事を伝えると、少しはにかむように微笑んだ。特に、家出娘ではないようだと二人は安心した。

週末になった。朝倉が山荘を訪れた。修一が最寄り駅まで車で迎えに行く。往復一時間かかる山道である。修一が時折、山荘や道の途中の風景を説明するが朝倉はただ頷くだけであった。山荘に到着すると、美江とあゆみが出迎えた。朝倉は美江に手土産を渡しながら、良いところだ言う。あゆみに元気がと聞いている。あゆみは元氣だと答える。山荘に入り、コーヒーを飲みながら四人で雑談をして、あゆみは父親に、これまで描いた湖の画を数枚渡した。朝倉はしみじみと見て静けさがにじみ出るような画だと何故か寂しげに言った。朝倉はあゆみの元氣そうな姿を見て、宜しくお願ひしますと言って修一に送ってもらい去った。修一が戻ってくるとうとう夕食であり、食後に美江と修一が今日の思いを語っていた。一先ずあゆみの身元がはっきりしてよかったと二人は思ったが、美江がぼつりと言う。「何かへん」「何か気になることがあるのか?」「朝倉さんもあゆみも母親について何も話さなかった」美江は言う。「何か、事情があるのかもしれないな」と修一が答えてこの話題は終了した。

夏のキャンプシーズンに向かって、学生アルバイト

は何時も数名は必要であった。美江と修一は話し合つて、あゆみ本人が気に入っているならば、夏だけでも働いてもらうこと決めた。幸い子供達が使っていた部屋にあゆみは住み込みで働くことになった。夏のシーズンはとても忙しい、山荘に泊る人の世話だけではなく、周辺のキャンプ場を利用する人のための炊事場やキャンプ場の掃除などが主な仕事である。あゆみはよく働いた。美江も修一もその働き具合にとても満足していた。やがて、夏が終ると学生アルバイト達は去つて言った。一人あゆみだけが残つた。

秋の初め、美江とあゆみはテラスの椅子に座り、あゆみの今後について話した。あゆみはこれからもアルバイトで此処で仕事を続けたいという。山々の囲まれた湖が大好きだという。あゆみの熱意を汲み取り、美江と修一は今後もあゆみをアルバイトとして雇用することに決めた。

秋が終り、冬になる。しかし、キャンプ場、山荘は通念営業のため開いている。訪れる人は少ないが、あゆみはよく働いた。春が終り、六月を迎え、あゆみが湖に来て一年が過ぎた。

事件は起こつた。午後の休憩の時である。あゆみはゴムボートに乗り湖の中心に行き画を描いている。何度か行っているの、美江はテラスの椅子に座り、その姿を

見ていたが、眠りに陥った。ヘリコプターの飛ぶ音で目覚めた。ヘリコプターの音。此処に戻って初めて聞く音だ。一瞬間な記憶が頭をよぎる。修一が遭難した日、ヘリコプターが飛び回っていた。ヘリコプターが去るまで見つめ、再び静寂が戻ってきた。ふとボートを見るとあゆみがボートの床に伏せている。驚いて美江はあゆみを呼ぶが、反応がない。修一にすぐ連絡すると、ライフジャケットを着けて湖に入ろうとする。「あなた！」と声を掛けると「大丈夫だ」と言っ、湖に入り泳ぎ出した。

ボートまで約七十メートルの距離だ。美江に二十年前の記憶が蘇る。荒れた海、風の音。あの日以来、修一が水に入り泳ぐ姿を見たことがない。美江はボートに向って泳ぐ姿を祈るように見つめていた。修一がボートに着き、乗り込みオールを漕いで戻ってきた。待ち構えていた美江はボートの中のあゆみに声を掛けると、「おかあさん」と言っ、目を閉じてぐったりとした。修一は抱きかかえて山荘の一室にあゆみを寝かせた。そして救急車で町の病院に運んだ。病室で横になってるあゆみは高熱を発症している。うわ言でおかあさん何度も呼んでいる。美江があゆみの手をそつと握ると安心したかのよう眠りに着いた。

その日のうちに連絡した朝倉が病院に着いた。落ち着

いて眠っているあゆみを見て安心したのか、あゆみが世話になったお札を言い、あゆみの過去について語った。あゆみが十歳の時に海難事故に合い、一緒にいた母親を失くし、あゆみだけが助かった。以来時として、思い出しては時に精神状態が悪くなり、失神することもあるという。

美江は二十年前の事故を思い出し、あゆみが限らない悲しみの中にまだいることを思いとても愛おしく思った。美江と修一は病院を出て、山荘に車で戻る時、美江は修一に聞いた。湖に入るのが怖くなかったかと。修一は怖かったが、あゆみが心配でボートにたどり着くことしか考えなかつたと答える。修一が水に入り、泳ぐ姿を見たのは二十年振りであった。美江は修一を見て、もう大丈夫だと安堵の心でいっぱいになった。

二日後、父親に付き添われてあゆみが帰ってきた。再び働きたいという。美江と修一は快く受け入れた。

四年が経った。あの事件以来、あゆみは美江のことを『おかあさん』と呼ぶようになった。買い物から戻ったあゆみの姿が山荘に入るのを見送った。

再び山々と湖を見つめた。此処で生まれて育ち、離れて再び新しい生活を始めて、子供たちは独立した。しかし、また、新しい生活を始めた娘もいる。この湖は、永遠に新しい生命を迎えているようだと思つた。(了)

予感

葉山美玖

今から三年前のことだ

八十九歳になる父親に

「ユニクロが苦戦しているんだよ」

と話した後

「最近、これが便利で使っているんだ」

とメルカリの画面を見せて

かんたんに説明をしたら

父は一言ぼそつと

「物々交換だ。まだ、物はある」

と呟いた

私はハッとしたり

前の大戦をくぐり抜けた父は

戦争はまずモノがなくなっただけでゆくことなのだ

ちゃんと知っていたのだ

私は押し入れの布団や古着を

整理しようとするのを辞めた
いつか

新しい服もそれどころか暖房も
なくなる日が来るかも知れない

そんな日は

本当は来ない方がいい

でも老人ホームにいても

父の鋭い目はちゃんと見ていた

力持ちの看護師さんの

踵の擦り切れたスニーカー

ベテランのケアマネさんの

百均で買ったポケモンの靴下

温かいまなざしの下の窪んだくま

父がいつか飽きるまで食べた

南瓜の煮付け

外は雨が

みぞれへと変わろうとしていた

てまり

東尾あや

野辺に夕暮れの風が吹き

しよろしよるとうわべの雪をまきあげていった

そんなふる里の夜はひとり

裏木戸をならしはじめた吹雪

私は早くに目を閉じ

幼い日

亡き母が小さい手のひらにのせてくれた

あかいてまりをおもってねむった

まーるい

まーるい

あかい

あかい
てまり

手がそれゝいつすべりおちたのか
ずつとさがしているがみつからない
年老いた今もさがしている

きつとみつける

みつけたら

ぼく

ぼく

ついて

ひよいとなげてみたい

あの人の胸に

白い言葉

爽秋の空は海の色

車椅子の母を連れ出す

虚ろな目はいつも

悲しみを湛えている

喉に大きな石がつまっている？

言葉に頑丈な鍵をかけた？

おねがい

何か言つて　どんな声してた？

病院の真夜中の闇に

毎夜　母は狂いちぎれたように叫ぶ

いえにかえして

おねがい　わたしのいえにかえして

長く続き周りの人に迷惑がかかるので

注射で眠ってもらいました

看護師は淡々と言つた

それ以来全ての言葉を奥底に封じ込め
母は口を閉じた

母をきつく抱きしめ

辛うじて聞こえるであろう右耳に問うてみた

お母さん

何かしてほしいことある？

なんにもない

雪のようなかすかなひとひらが
胸に沁み入るように落ちてきた

母が逝つてからも幾度となく

遥かな空のあわいから

白い言葉が舞り降りてくる

光太郎爺さんと連翹と

— 中西利一郎氏の話から —

曾我貢誠

昭和二十七年秋のことだ

アトリエに現れた時は誰だと思ったよ

光太郎という立派な人だと聞かされていたけど

ぼくにはただのお爺さんにしか見えなかった

中学生だったし、あまり興味もなかった

でも、お爺さんすごくやさしかったよ

正月には、みんなでお屠蘇を食べた

にこにこしてお年玉までくれたんだ

乙女の像を作り始めてからは

一心不乱そのもので

何日もアトリエに籠っていた

智恵子さんと対峙していたのかな

家の者も誰も近寄り難かった

母が誰も近づけなかったからだけど

庭先に黄色い花が咲いていた

ある日のこと、母に聞いたそうだ

—その花は何といいます

—連翹ですよ 亡くなった夫が

疎開先から持ってきました

—好きだなあ この黄色い花

レモンに似て 情熱の色で

昭和三十一年、四月一日

春には珍しく昼から雪が降ってきた

心平さんは夜の十一時過ぎまでいたんだが

「今日は大丈夫だろう」といって帰っていった

帰ってからすぐにアトリエの非常ベルが鳴った

容態が急変して、また血を吐いていたのだ

付き添いの二人の看護婦さんは青い顔をして

懸命に点滴や酸素吸入の処置をしていた

「心平さん呼んで来て」母が慌てていう

大久保の心平さんに知らせるため

真夜中、降りしきる雪の中を

ぼくは一目散に駆け出したんだ

みんなの思いも空しく

お爺さんは明け方近く亡くなった

心平さんも高村家の人々も

みんな間に合わなかった

お爺さんの棺の上には

水の入ったコップが置かれ

一輪の連翹が挿さっていた

雪に埋もれた中から一本だけ

母が心を込めて取り出したのだ

あの日からもう半世紀以上経った
気が付いたら、中学生だった自分が
もうとつくにお爺さんの年を越えている

今年も庭先に咲いたねえ

アトリエはくたびれて来たけど

黄色い連翹だけは変わらない

レモンに似て 情熱の色で

なぜか 元気が出るなあ

(2024.4.2)

注・中西利一郎は水彩画の父と言われた中西利雄の長男。利一郎は令和五年一月、八四歳で永眠。母は富江。心平は草野心平。高村光太郎は、昭和二十七年十月から中野区桃園の中西アトリエで過ごす。十和田湖畔に建つ「乙女の像」の塑像を制作した。昭和三十一年四月二日午前三時四十五分永眠。七十二歳。翌年の命日に第一回連翹忌をこのアトリエで行う。連翹忌は場所を変え、現在も続き、今年は六十八回目を迎えた。

いただく

命はすべて

太陽の光でできている

できた命を

別の命がいただいて

地球の命をつないでいく

命はいつもはかない

夏の終わりのセミの亡き骸

ガレキにたたずむ少女の涙

今日も、私は

かみしめていただく

目の前に置かれた

太陽の光だったものたちを――

第19回 種川とみ子 個展を鑑賞して

齋藤 巧
妙圓蘭 勉
西村 芳秋

穏やかに前向きに

齋藤 巧

昨年末、新橋で開催された個展を訪れる機会を得た。エメラルドグリーンとターコイズブルーの絵画の印象。鑑賞しつつ勝手にフランスの色彩を想像してしまった。エメラルド（パリ）グリーンはパリのメトロを、そしてターコイズ、アジュールブルーは南仏の色を。ゴッホにおけるパリと南仏の作品との比較。南仏を愛した画家にはマティスもある。だが、個展の最初の作品は「顔」。まず自分自身を今一度見つめ直せということなのか、描かれているエメラルドグリーンの長髪の女性は、どこか色彩は暗めで、髪質の描き方も艶やかな表現でなく、何か心の不安定な状況をうかがわせる。「顔」から「夢」「希望」と続く中、途中、年老いた女性絵画を経て、最後に黙（しじま）」となる。この作品が画廊の中央最奥

に展示されているのは、作者の最も主張すべき作品だからであろう。「黙」は人がいながら口を閉ざし静かな面持ちを保っている、確かに暗い色彩で男女が描かれ、空の部分は青みがかかるが、そこに無限の静寂を感じる。私は当初ヴァンスの礼拝堂を想像し、ミモザ色のステンドグラスが思い浮かび、光と陽を得て天上に向かう、と解釈したが、種川さんには光の部分はなく、それでも口を閉ざす男女にも通じ合う思い、救われる部分があるのだろう。「再生」や「夫婦愛」を唱えているのだろうか。後に作者の経験を知り光、陽の部分だけでは補えない対極の思いが分かる。救済という点で両者は一致しつつも、マティス礼拝堂の南仏の花ミモザ色↓向日葵↓太陽（ソレイユ）↓光のもつ明るさ、ポジティブ感（積極的）が好まれる西洋的価値観の一方、種川さんの背景から来る、黄系統の色彩がない光・明るさからは、言葉では語れない世界から来るエメラルドグリーンの落着き、「黙」、口を閉ざすも人の存在と互いを理解し合える関係性、言葉による自己表現の西洋的感覚に対する以心伝心といった、ある種抑制的な東アジア儒教的価値観の対比を感じさせる。更に『ファウスト』をテーマとする一連の作品から気づいたのは、地獄といった悲劇的狀況からの救済という点で共通しつつ、それを別視点からアプローチしているのでは、という発見をすることとなる。その画家がキヤ

ンバスに込めた視点を読み解く際の鑑賞者の解釈に一つの答えがある訳でなく、様々な視点、考えに触れて揺れ、それが自身の財産、人生の豊かさとなる点で、絵画好きとして非常に有意義な個展となった。(美術愛好家)

画家の眼差し

妙圓菌 勉

画は時として、言葉での表現を一瞬で超えることがある。今回の種川氏の個展にファウストⅡ(文治堂書店出版)の挿画が展示されている。その中で「昇天」と題をつけた画がある。

ファウスト第一部は悲劇で終る。獄中から「ハイインリッヒ！」と叫ぶマルガレータを残しメフィストと共に何処かに姿を消す。ファウストは失意に埋もれ、自己を責め続けた日々であろう。その期間、行動については記述はない。第二部の冒頭は「ファウスト、花咲く野に身を横たえ 疲れて不安のなか眠りを貪ろうとする」という文章で始まる。画に戻ろう。眠るファウストの表情は極めて穏やかである。それは、自己を責め続けた日々から解放されたように安堵の表情で眠っている。天上から

注ぐ光はとても柔らかくファウストの穏やかさを象徴しているかのようである。そのファウストを取り囲むように妖精達がいて「新しく巡る日々に思いを馳せ、迷いなく大胆に進みなさい」と語りかける。新しい世界に進む前の一時のファウストの安らぎを表現した画であろう。

この他に五枚の挿画があるが、全て物語の重要なポイント、ポイントで表現された素晴らしい挿画はファウストⅡを支えている。

種川氏の個展でメインの画は「黙」(しじま)と表題のついたM120号の画である。青い深い霧が罹っている中、大きな暗黒のような塊の下に、男女の横顔の頭部が向き合っている。濃い茶と黒色の入り混じった複雑な色彩である。それは前述、暗黒という表現した塊と同様の色彩である。その塊は二人の心情を表現しているのか定かではない。

種川氏の作品を見て何時も感心するのは「青(蒼)」の使い方である、淡い青、暗い青、鮮やかな青など、様々な青を使い分けている。「黙」で見られるような淡いそして暗い青。人物像の顔の部分青色でアクセントを入れることにより、より表情が豊かになる。また、暗い青の世界が広がっている画もある。更に2年前の個展で、モルフォ蝶は単独で描かれていたが、今回は画の一部の構成として描かれている。モルフォ蝶は青い燐光

を羽根に持つ蝶である。その美しくも怪しい光を放つ蝶は多くの人を魅了する。私も世界でもっとも美しい蝶であると思っている。そのモルフオ蝶の持つ青い色彩を種川氏は見事に表現し画の中に登場させている。種川氏の青い色の表現の探求心が結実している一枚の画である。

種川氏の画には度々羽根を広げ飛ぶ白い鳥の姿が描かれている。一羽の時もあれば、三羽の時もある。背景は暗い青をベースとして、尚暗い茶黒い岩のような物体が存在している。その中を白い鳥が飛んでいる。背景の色彩のなすイメージが絶望、社会の暗部、人間の闇の心など否定された世界を表すならば白い鳥は救い、或いは希望を持って世界を抜け出す象徴のように感じられる。

猫―種川氏は猫が好きだと言う。度々、猫は氏の画に登場する。今回の個展では、女性と猫のモチーフで三作あった。面長でやせた表情で白い帽子を深く被って猫を抱いていると思われる。画には女性の顔と下あごあたりに猫の頭が描かれている。白黒の猫で、眼がキョトンとしている表情が無表情の女性と対照的で面白い。

最後に、今回の個展でかなり趣の異なった画があった。一人の年老いた女性の画であった。茶色い肌の色、老いているとは言え、鋭い眼差しである。私が暫く見つめていると、種川氏が解説してくれた。「この画は、わたしの将来の自画像を想像して描いたんです」えっと思ひ、

種川氏の顔を見ると、画とは全く違う柔和な目で語っている。画の題名は「追憶」である。その画に描かれた鋭い目は私が知らない氏が画家として物を見続けている本当の姿であろうと思った。

私の感想

——第19回種川とみ子展——

西村芳秋

魅力的な種川さんが魅惑の作品を描き、観る者の心を魅了させる世界と申しましょうか、これらの作品それぞれに独特の空気感があります。風を感じられるだけでなく、川の流れの様な動きもあり、平面の様で立体に見える不思議な感覚にとらわれます。空間の奥までも見える作品には心惹かれるものがあります。彼女の描く色彩、絵画への感性は最高です！人生遍歴を重ねて生まれた独自の表現方法であると思います。

それらから作家の心が伝われば満足なのでは、と考えるかもしれませんが、わたしもその様な境地まで至りたいと思います。私自身も更に知見を深め、種川さんの見ている世界に近づきたいものです。

(画廊オーナー)

追慕録

勝畑耕一

1月 ベッケンバウアーが亡くなった。ドイツのファンは親しみを込めてフランツと呼ぶ。そしてその人格と業績を讃えて「カイザー」（皇帝）とも。活躍した場合はバイエルンミュンヘンやドイツ代表監督。南米のペレや馬拉ドーナの華やかさはなくとも盟友ルンメニゲが言う通りエレガントという形容が相応しいドイツサッカー界のスターだった。積極的に前線に参加する現在でいう「リベロ」役が似合った。（78歳）

2月 平田博則先生が亡くなられた。囲碁を趣味とする年配の方ならだれもがご存じだろう、昭和時代に活躍したアマ四天王の一人だ。アマチュアといっても戦時中にはもうプロ登用試験を待つ院生だったからセミプロ以上といつてよい。戦後は成蹊高校で数学を教え始める。なんとその頃国語には俳人の中村草田男がいたというから豪華な教師陣だ。その時の生徒には整の息子伊藤礼さんや「とんぼ」同人の吉田邦郎さんがいた。30年が経った。著名になった先生を囲んで囲碁を学ぶ「平田会」が誕生し、その最後の数年にわたしも関わらせていただいた

た。芦ノ湖にある成蹊寮での泊りがけの囲碁合宿は本当に楽しかった。定期的に会の謝礼をお渡しすると返礼に九州の八女茶を頂いた。

告別式は青梅郊外の大きな葬儀場。小雨のこの日、我々のみ。待ち時間には「悲愴」の第二楽章が静かに流れていた。脑梗塞を患い2022年夏から自宅で闘病生活だったという。コロナ禍前まで90歳を過ぎてても福生から吉祥寺のコミセン（対局場）まで来て囲碁を教えていただいた。ということは、歩いて石を掴む体力さえあれば囲碁は脳の活性化、ボケ防止に役立つことが実証されたといつてよい。実力向上は叶わぬともインドアスポーツとして私も続けていきたいと思う。ところで戒名に「碁」の字を入れたかったそうだが檀家から断られたという。代わりに棺には紙の碁石碁盤が入られていた。囲碁と共に歩んだ素晴らしい人生だったと思う。先生！天国で伊藤礼さんとゆつくり対局してください。97歳

2月 小澤征爾が亡くなった。幼少期を満州帝国の北京で育ち、日中国交正常化により戦後現地を訪れているが、その時の映像はユーチューブで見ることができ。父開作（1989～1970）は歯科医師だったからか、護衛の憲兵も門前に常駐していて、その青年とも家族ぐるみの付き合いがあったという。征爾の征は板垣征四郎（1885～1948）から、爾は石原莞爾（1889

(1949) からというから、満州建国の立役者二人と「民族協和」を主張する開作には当然何らかの接点があったのだろう。戦争が激化する前に開作が妻と子供たちを日本に戻したことは良い選択だった。戦後は日曜学校で賛美歌を歌った母、皆が協力して運んでくれたピアノ、斎藤秀雄との出会い。どれも「世界のオザワ」音楽家小澤を創るのに欠かせなかった逸話である。

渡欧資金の調達を始め、周囲のサポートが良い方向に回り始めたのは小澤の個人的な魅力なのだろうか。そのキャリアは確かに破格だ、フランスのブザンソン指揮者コンクールで優勝、バーンスタイン・カラヤン・ミュンシユ・クーセビツキー夫人らと僅か数年の間に知り合い、その後のポストン響常任の絆を考えるとN響との事件など歯牙にもかけなくなつたのだろう。その原因は度重なる遅刻とか、音楽観の違いとか、指揮態度が横柄だとか言われているが、もうどうでもよい。そして三十年後、いつまでも根に持っていては駄目だ、とN響との共演を後押ししてくれたのがロストロポビッチ(1927-2007)だというから驚きだ。

私が小澤を見たのはN響事件から10年後、大学の先輩、木下さんにバッハの受難曲の練習風景を観に(桐朋音大か?)大学のホールに連れて行ってもらった。一時帰国していた新日本フィル創設の頃らしい。

ところで小澤の音楽観に異をとなえた人物がいた。合唱指揮からスタートし、音楽評論家の宇野功芳(1930-2016)である。癖のある自己の主張を押し通す批評で、要は聴衆に迎合して「カリスマ性」がなく音楽がつまらない、とかだったか。朝比奈隆を大切にした宇野だからその思いも分からないでもない。さて宇野も斎藤秀雄指揮教室に学んだというが本当だろうか。

西欧音楽を学ぶのに人種は関係ない、アジア人でもそれは可能だ。それを自ら証明してくれた、その最初の第一歩は小澤征爾から始まったと言っている。プロ野球界では野茂英雄か。

前妻の江戸京子が1月に亡くなり、その翌週に小澤が亡くなった。ユーチューブでは連日若い時からのコンサートやドキュメンタリーの映像が流れていた。

ところで英語を指揮者から楽団員への意志の伝達機能、つまりはプラス・マイナスをはっきり伝えるという意味でとらえれば、リハーサルでの英語は申し分ないが、英語の特性もあるのだろうが、比喩や深みのあるレトリックがなく私にはほんの少し残念な思いもした。もちろん団員と作り上げた本番の演奏が良ければそれでよいわけだが。一昨年から何回も見たのはマルタ・アルゲリッチを迎えたサイトウキネンオケとの「合唱幻想曲」(ペートーヴェン)。それが私の小澤のベスト盤だ。(88歳)

詩歌三評 佐藤映二

四季に寄り添う

安部克詠／山下知津子／清水道徑
北川光彦／服部 剛

履歴

- 一九三七年 福島県福島市に生まれる。
 - 五六年 県立福島高等学校卒業。
 - 六一年 一橋大学経済学部卒業。
 - 六二年 日本興業銀行。
 - 八三年 宮沢賢治研究会会長に（一七年間在任）。
 - 八九年 俳句結社「岳」に入会。
 - 九六年 宮沢賢治生誕百周年祭委員会委員長。
 - 九七年 路傍舎（まつど宮沢賢治研究会）を設立。
 - 二〇〇〇年 宮沢賢治研究会顧問に。
 - 二〇〇一年 セブンカルチャークラブの俳句講師に。
 - 一五年 岳俳句会同人会長に。
 - 二三年 岳同人会長を退任し顧問に。
- 著書
- 句集 『羅須地人』『わが海図・賢治』『葛根湯』
 - 評論 『宮沢賢治 交響する魂』
 - 随筆 『四季と折り合う』『四季に寄り添う』
- 訳詩集 『デ・ラ・メア詩選』

随筆「四季に寄り添う」

に漂うもの

安部克詠

先ごろ、標記「四季に寄り添う」を惠贈された。

著者佐藤映二氏は俳誌「岳」誌の先達であり同人会長でもあった。私にとつては旧知であり俳句会を通じてのご指導と共に薫陶を頂いて居るほか、周知の宮沢賢治研究者として、事あるごとに私の住む花巻市に足を運ばれており、当地でもその道の知る人ぞ知る方である。その映二氏を語るとき宮沢賢治を除いては語ることはできない、と言っても過言ではない。

さて、「四季に寄り添う」のその一篇一篇は「岳」誌に俳句とともに毎号掲載されて来たもので、話題はそれぞれで、今まで都度読みながらも失礼ながら読み捨ての感があった。今、まとめて通読し氏の広範な識見と世界観、そして作者の人生感など、その半生の一端を知った。全体の底流にあるものは賢治であり、俳句であることは言うをまたない。通読して思うに美術、音楽、詩にと芸術全体の造詣の深さ、広範な知識とドイツ語、英語と堪能であり、先頃の「デ・ラ・メア詩選」の翻訳など私には思うべくもなく、惠贈の

本随筆集の評なども逡巡したものであった。

p・18、音楽における転調と俳句の「切れ」、を「読し触発され、ベートーベン、バイオリンソナタ「春」を聴いた。音楽に何の知識も持たない私は意識して俳句との何かを考えたが、せいぜい季語の「轉り」を連想した位だった。音楽の転調と俳句の「切れ」、また「省略」等の相似性等について、そう言えば文章や詩文の行間、話芸の「間」なども通じるもの、と示唆を得た思いがした。又p・74、賢治の詩の魅力とは、の中で、著者が最初に賢治の作品に触れたのは「セロ弾きのゴーシュ」だった由。それについて古くあるが当時坪田譲治は、賢治の作品のユニークさは、可笑しみ、ユーモアにある、と言っている。譲治は「猫がゴーシュの畑から取ってきたトマトを、お土産と言ってゴーシュに差し出した」、郭公は「カッコウカッコウ」と鳴くばかり。野ねずみの子がセロの穴に潜り込んだりで、おかしみがある」等と書くのである。(宮導賢治研究・草野心平編) 著者もそうしたところも感じられたものかと思う。

また「有明」「早春独白」を引用された二文等、賢治の作品はどの作品であれ、読んで直ぐ解るものは少なく、難解な言葉も多く、深い研讀が要り、広い知識、イメージ、詩心がないと簡単には読めない。

氏は流石にこれらの詩の魅力を見事に解説され、賢治の

作品でありながら、独立した現代散文詩を読むように解かれている。また、翻つて「デ・ラ・メア詩選」にしても、豊富な日本語の中からの語彙を選び、どう全体の詩情を構成するかで、原詩の生殺が決まり、評価も左右されるもの。その意味で、同じようにデ・ラ・メア詩選もまた訳者、映二氏の独立した作品と言う事もできよう。本随筆集の一章毎の評は稿の制限より先に、正直私の及ばぬ領域であり、いざさか避けた嫌いもある。

概評を言えば全体を流れるものは宮沢賢治と俳句を核とした思惟であり詩情の構成で、映二氏の半生の記録とも見ることが出来る。映二氏は跋の中で、間もなく米寿の旨触れておられるが、本年、岳の同人会長を退かれた事も関わるのか、静謐な文脈中にどこか寂しさが漂うように読み取れ、私の心に澱のように留まっている。

人生百年米寿なものぞ。高齢化社会と言われるが、であれば、高齢者の時代と言いつ換えたいもの。(筆者も米寿が近い、儂い抵抗でもある)

映二氏におかれては「俳句と賢治を楯円に」との思いをこの後も一層追求され、言われるところの「交響する魂」(佐藤映二著・宮沢賢治交響する魂・2006年刊)を発信され、後ろの私達を先導されたいと願う。

(岩手県現代俳句協会副会長・花巻俳句協会会長)

春光と賢治と

山下知津子

『四季に寄り添う』は、「岳俳句会」前同人会長の佐藤映二氏が「岳」誌に毎月連載したエッセイをまとめられた瀟洒な一書である。どのページを開いても、文学、美術、音楽、そして俳句に関する氏の豊かな造詣が綴られている。その文章はなめらかで明晰、かつ優しい向日性を湛えていて、拝読していると、春の光を浴びているような明るくしなやかな心持ちになる。

各エッセイのテーマは、私も日頃から心惹かれていたものが並んでいて、胸が躍るのである。特に強く引き込まれたのは、各章のタイトルから挙げさせていただけでなく次のようになる。「ベートーヴェンと人類と」、「モーツァルトの〈死〉への姿勢」、「音楽における転調と俳句の〈切れ〉」、「ピカソの「ゲルニカ」は武器?」、「飯島晴子のこと」、「小磯良平の聖書挿画」、「現代に生きるブドリ」、「もう一人のブドリ 中村哲さん」、「最晩年のマティスの傑作——ロザリオ礼拝堂」等々。これらについて、概説書的な叙述ではなく、佐藤氏自身の実体験と見聞に基づいて、数々の貴重なエピソードを交えた生き生きと自在な筆致で語られる。私自身「ゲルニカ」を見た

くて当時小学生だった娘を連れてマドリッドに行き、防弾ガラス越しに実物を見て足が震えたことを思い出す。二人のブドリ、即ち雨宮清さんと中村哲さんに関する文章には目頭が熱くなった。また俳句を作る者として〈切れ〉や飯島晴子ことは常に私の頭のどこかにある。そして「斉唱」に感銘を受けて以来大好きな画家小磯良平や、憧れているロザリオ礼拝堂についての文には胸が高鳴った。佐藤映二氏と多くの志向を共有させていたように、私は本当にうれしく、感激するのである。共有といえば、私が繰り返し読んでいた須賀敦子について、以前若松英輔著『霧の彼方 須賀敦子』に触れつつある誌面に書いたものをお読みくださった佐藤氏からお手紙を頂戴したことがある。「私も若松英輔のその著書を読みました。またかつて須賀敦子の講演を聴いたことがありますが」と認められていて、私はそれ以来深い親しみと敬愛の思いを佐藤氏に抱かせていただいている。

昨秋、私の住む市川市内で若松英輔氏の講演会があった際、佐藤氏に声をお掛けしたところ、奥様と二人で足を運んでくださった。講演後私の娘も含めた四人でお茶を飲むという幸せな時間を賜った。ドイツ日本興業銀行で勤務され、ドイツ滞在が長く、ヨーロッパ各地を巡られた体験をお持ちの佐藤氏から、貴重な興味深いお話の数々をうかがったことを喜びと共に思い出す。

『四季に寄り添う』には「賢治を詠む」と「あの田谷力三が賢治のために歌った夜」という章がある。また同著の後半には「宮沢賢治の世界へのいざない」と題された随想が掲載されている。冷静周密にして温かく人間味溢れる賢治論で、恥ずかしながら賢治について無知に等しい私は、感銘を受けつつ多くのことを学ばせていただいた。佐藤氏は若き日宮沢賢治に出会い、私淑。宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事を務められ、また「まつど宮沢賢治研究会」を創設なさつてもいる。

賢治は愛する亡妹トシの魂との交流を求めて、一九二三年サハリンを旅した。佐藤氏は九四年、「賢治の詩想にあやかりたい一心から」十人ほどのお仲間とユジノサハリンスク（旧豊原）や栄浜を訪問なさつた。氏の賢治追慕の思いのみずみずしさや一途さ、つよさは、鮮烈に迫ってくるものがある。

少し話が逸れて恐縮だが、女性俳人の最高峰と言われる橋本多佳子も、一九二五年鉄道省主催の「樺太・北海道旅行」に夫・豊次郎と共に参加。この時北原白秋も一緒だった。多佳子には後にこの時の旅行を詠んだ「国境安別」六句（句集『海燕』所収）がある。

当時の人々にとってサハリン（樺太）という北辺の地は、何かしら特別大きな魅力を持っていたのだろうか。

佐藤氏のご見解をうかがってみたい気がする。

それから、不勉強な私には、賢治が日蓮宗の熱心な信徒であったということが少し不思議に思えなくなかった。このことについても、可能ならばいつか佐藤氏から教えを請いたいと願っているのだが、昨年一つ重要な学びを得ることができた。Eテレ「100分de名著」において、仏教思想家・作家の植木雅俊氏が「日蓮の手紙」というタイトルで四回にわたって語られた。その講義を聴き、テキストを読み、また植木氏ご本人にお目にかかる機会にも恵まれて直接お話をうかがい、私の認識が間違っていたことを知った。日蓮は信徒たちに、一人ひとりの状況に即して人間的な温かみとユーモアさえ漂う多くの手紙を書き送っていたのである。日蓮は激的な攻撃性をもって語られる人物などではなかった。そして『法華経』は釈尊の教えの原点に帰ろうとする指向性を持ち、小乗と大乘の対立を乗り越え、融和させることを課題として成立したと植木氏は述べておられる。

賢治はその稀なる詩魂をもって『法華経』を読み、日蓮を識り、直観と求道性に基づいてそれらの本質を、全体まるごとを、理解し把握したのであるか。佐藤氏からお教えたいただきたいことはたくさんあるのである。

（俳句同人誌「麟」代表）

『四季に寄り添う』によせて

清水道徑

著者佐藤映二さんは、宮坂静生主宰の俳誌「岳」の同人会長をこの一月まで、長らく努めてこられた。俳人であるとともに宮沢賢治研究をライフワークとし、音楽をはじめ芸術に造詣が深い。

この『四季に寄り添う』はその月刊「岳」誌に俳句とともに連載された小エッセイから抜粋されたものと、新たな随想をまとめたもので、以前に出された『四季と折り合う』の姉妹編である。俳句しか知らない筆者が、この紙面で何編かのエッセイから触発されたものを書いてみることにする。

Ⅱ 音楽における転調と俳句の切れ Ⅱ

音楽に疎いので、この「転調」を調べてみた。「楽曲の進行中に、その調を他の調に転ずること」（広辞苑）とある。この言葉から次のことを思い出した。「岳」で二〇一九年に写真（写生）についての同人研修会を行った際に俳句における「移調」を山本健吉の『俳句とは何か』から取り上げたことを思い出した。その例として〈つるかつかと来て踊子にささやける 高野素十〉の句である。作者はドイツのハイデルベルク大学に留学中に体

験した踊場の一風景から、日本の盆踊りの風景の一齣を導き出している。「踊」といい「踊子」という季語として十七音の中に投げ入れている以上、作者はそのようなものとして受け取られることをすでに予期しているのである。これが俳句における移調である。

奇しくも、この年の七月宮坂主宰は高野素十が留学したハイデルベルク大学で講演と俳句のワークショップを行った。そこに佐藤映二氏と私も含め十数名が参加。偶然とはいえ感動的な出来事であった。

Ⅱ もう一人のブドリ 中村哲さん Ⅱ

ブドリとは、宮沢賢治の童話『グスコブドリ』のブドリである。その童話を読み返してみた。……ブドリ一家は冷害飢饉で離散。ブドリは自分の運命を切り拓くため働き、学び、科学者として成長。多くの農民を不幸に陥れる自然の暴威、冷酷にむかい、生活を守るには科学的に実証することだと考え、農民のしあわせのためにつくした。……冷害を救う方法はカルボナード火山島を爆破して炭酸ガスを吹き出させ、大気中に充たして温度を高めるしかないと判断する。それより考えられないから実行する。そのとき命はない。しかしブドリは「やらねばならぬ」と決意する。ブドリは火山を爆破して自分は死に、人びとの不幸を救う……

こんなブドリのもう一人のブドリは中村哲さん。二十

年ほど前、アフガニスタンで治水灌漑のための事業を続けていた中村哲さんが、花巻市よりその年度の『イーハトーブ賞』受賞の知らせを受けたときの話である。

当時の現地は未曾有の干魘下で、用水路建設の途上であり、来日どころではなかったという。

「小生が特別にこの賞を光榮に思うのには訳がありません」と前置きをして曰く「……セロの練習という、自分がやることがあるのに、次々と動物たちが現れて邪魔をする。仕方なく相手をしているうちに、とうとう演奏会の日になってしまふ。てっきり楽長に叱られると思つたら、意外にも賞賛を受ける。私の過去二十年も同様でした」と。

哲さんは、医療の専門家としてペシャワール（アフガニスタン）に赴任。本場に必要なのは医療や教育ではなく「水」と「食料」であることに気づき、井戸と運河を掘ることを決意されたとのこと。そして荒れ地の蘇生に尽力し、凶弾の犠牲になられたグスコブドリである。

その中村哲さんは二〇一六年八月長岡市の「リバーバンク」の講演のため訪れ、講演に先だって信濃川の洪水の歴史から建設された大河津分水路を見学。巨大な大河津分水路は将来的に参考になる考え方が沢山あると話され「また、訪ねてきます」と言われたとのこと。

梅雨に入るカカ・ムラド来し大^{すい}河津分水も 清水道徑

〓 模擬原子爆弾わが故郷の福島に〓

この表題を見た時、わが生地長岡市にも投下されたことを思い出した。長岡花火の揚がる信濃川の長生橋付近の河川敷に長岡空襲の十二日前の一九四〇年に七月二十日に投下され、そこで畑仕事をしていた若い兄弟二人が亡くなったという。その模擬原子爆弾については、当時四歳で親から聞かされた記憶もなかった。

最近の地元紙新潟日報の特集記事で、全国に四十九発投下され、県内では柏崎市と阿賀町にも投下されたところ。しかも、長岡に投下されたものは誤爆だったのではないかという。信濃川のもう一本下流に蔵王橋があり、その右岸は長岡の工場地帯であった。本来はそこが目標だったのでという記述があった。

投下されたものは、プルトニウムの代わりに火薬が詰め込まれていて、直径八メートル、深さ五メートルの大きな穴が空いたという。模擬爆弾の誤爆と言えども、恐ろしいことである。

今のロシアのウクライナへの侵攻。イスラエルのパレスチナへの報復攻撃。八十年前の戦争とは違ってミサイルなどの攻撃能力の進歩は想像を絶するものがある。それにより連日多く的一般市民が犠牲になっている映像が即刻流される。早く和平交渉で何とかならないかと思つている。

俳誌「岳」同人会長

豊かで充実した人生の記憶

北川光彦

本書は、佐藤映二氏が俳句結社「岳」の俳句誌に連載していた小エッセイをまとめたものです。宝珠のような小エッセイ三五編が納められています。月一回のペースで書き記された文章からは、筆者の知的で充実した豊かな人生の感触が伝わって来ます。

例えば、本書の「ベートーヴェンと人類」の中では、著者が指揮者・広上淳一氏の言葉「一音楽家としてではなく、地球人として自分はどう生きたいか、人にどう生きて欲しいかを問うような音楽を創ったのが彼（ベートーヴェン）だ」と明言したことに感銘したことを記しています。銀行の経理部、ドイツ・スイス・ローマ他での勤務、宮沢賢治学会理事・研究会会長、俳句結社での活動等々、幅広い分野と国際的な視野を持つ筆者の経歴に支えられた人生が、人工の権威の枠（狭い社会・専門分野のアイデンティティ）に囚われない地球人としての人生を生きることへのこだわりに共鳴しているのではないかと感じました。西欧ルネサンス時代の全体的人間像が思ひつかびます。この最初の小エッセイの言葉だけでも、ミヒャエル・エンデの「モモ（時間泥棒の話）」「エ

ンデの遺言『根源からお金を問うこと』（利子や貨幣のこと）。そして、西欧的ユマニスムの選手ロマン・ロランが著した「ベートーヴェンの生涯」の中の言葉「思想もしくは力によって勝った人々を私は英雄と呼びたい。私が英雄と呼ぶのは心に拠って偉大であった人々だけである。……成功はわれわれにとつて重大なことではない。……そして彼らが力強さによって偉大だったとすれば、それは彼らが不幸を通じて偉大だったからである。……」。さらには「ジャン・クリストフ」の第十七回目が掲載された時、巻末に記したロマン・ロランの告別の辞に対する要約、『クリストフと名づける英傑は、なにごとつあやまちをおかさなない聖人でも君子でもなく、政界や戦場で勲功を立てた英雄でもなかった。……ロランは、そのような英傑のまわりにフランス人を集めて、祖国をよみがえらせようと願った』……。岩波新書（赤版R-19）「ミケランジェロ（羽仁五郎著）」の中の人間の発見、人間の平等を表現したミケランジェロの裸体表現。岩波文庫（赤五五六―三）「ミケランジェロの生涯（ロマン・ロラン著、高田博厚訳）」等々、次々に読者の頭の中の連想が始まり止まりません。

また、「岩波新書は人生の羅針盤」の中で筆者はこんな言葉も引いています「常に時間に追われ、効率を追い求める生き方が、現代人の心を破壊しつつある」。この

言葉からは、二〇二三年一〇月七日に勃発したイスラエルとハマスの戦争でのユヴァル・ノア・ハラリ氏（『サピエンス全史』の著者、イスラエルの歴史学者）の発言、「今、日本（イスラエル以外の国々）へお願いがある、至急、平和について考えていただきたい、今の私達（戦争に突入しているイスラエル）には平和・和平を考えるだけの心の隙間・余裕がないから」という趣旨の言葉を出しました。冷静に状況を見極めるには、心を動かせる隙間が必要。「心を動かせる隙間（自由と言ひ換えてもよいかもしれませんが）を維持・確保できること」は、個人レベルでも国家・人類レベルでも切実に大切なものです。それは、命がけで守らなければならない隙間です。本書の「ジョン・ミュンフンと東フィル」の中のマーラーの名言、「音楽で本当に美しいものは音符の中にはない」から気づかされるのは、「音楽は人間の側にあるということ。同じ楽譜でも演奏者によって指揮者によってそれぞれ異なる音楽が生まれます」。「大事なのは、歌ではない。歌がつくりだすものだ。（長田弘）。楽譜があっても音楽は生まれません、音楽だけあっても意味はありません。音楽とそれを聴く人がいてはじめて、感動がうまれます。大事なのは音楽ではない、音楽が作り出すものです。

花鳥風月、自然の中に美があるとすれば、当然、その

美の背後には、その自然を作った造物主の神や仏の存在や意志が反映されているはずではないか。高村光太郎はどうしても、美の背後にいる神の必然性に納得できなかった。美は人間の側の問題でした。

宮沢賢治、けちくさいことのいっさいない草野心平、高村光太郎にとって、神ではなく仏でもない、あるがままの自然の一員である人間として、「四季に寄り添う」ことが、人工の権威に寄り添うよりもはるかに重要で、人としての根源であること。たとえば、権威・立身出世を良しとする社会・世の中であつても、立身出世を認められることよりも、（心の中のコスモスを護る）デクノボウのようであることが大切であることもある。宮沢賢治ならそう思ったのではないだろうか。

「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ（松尾芭蕉）」ではありませんが、四季に寄り添い、宮沢賢治の遺したものを護り、東洋的理念と西洋的理念の結婚によって生まれたかけがえのない感覚、途絶えて欲しくない人類の大切な気質・文化、すなわち賢治が発見したものの、そして求めたものを次の世代につないでゆく筆者の豊かな視点の詰まった本書は、これから人生を積み重ねてゆく若い人だけでなく仕事をリタイアして人生をふり返ってみる人にとつても、人生の指標になりうる良書だと思いました。

日々を味わう

服部 剛

私はいつになったら、大人になるのだろうか？——数ヶ月後には五十歳になる私は時々、漠然と思う。子供の頃、五十といえば立派な大人というイメージをもっていたが、いざ大人といわれる年齢になってから、その実感を得たことはない。

生きるということとは、いつか世を去る日までゴールは無く、成長しうるものである。そういう意味で私は大人になるといふよりは、年齢を重ねながら「日々を味わう」という感覚が青年期よりも深まっていると思う。

今年米寿を迎えるという佐藤映二氏の新著『四季に寄り添う』を読みながら、著者が本から語る文と共に、私の日々を想い巡らせた気持ちになった。生きる限りゴールはないといえども、私より四十年も生きる著者の言葉には、やはり長い歳月を歩いてきた日々の想いが節々に垣間見える。その中でも、やはり著者が若き日に兄の本棚から『宮沢賢治名作選』を偶然見つけ、感動し、やがては宮沢賢治研究会の会長を務めた佐藤氏が賢治について語る文は、実感をもって伝わるものがあつた。

岩波新書について語る箇所では、著者が以前主宰して

いた俳誌『岳』の現主宰者・宮坂静生氏の『季語の誕生』を紹介する。原初的なアミニズムは平安時代よりも遡り、文字の記録の無い縄文時代にあるという着目は興味深く、本書の随想『宮沢賢治の世界へのいざない』で佐藤氏が後述するイーハトーブの自然風景と呼応するものがある。続く本書最後の随想『知里幸恵、萱野茂、そして、わが賢治』では、賢治が「亡き妹トシの魂との交流を求めてサハリン中部の白鳥湖に到る所まで旅した」という。その賢治のイーハトーブの生命観は、アイヌ文化の深い霊性と神謡集の感覚に通じることを知り、深い共鳴を覚えた。

他の箇所では、俳人・山口青邨の「雑草園」から眺める庭や、美術館で再現された「マティスの礼拝堂」を訪ねた記録も味わいがある。音楽・芸術を愛する著者の平和への願いも本書の節々から伝わってくる。

『四季に寄り添う』を読了した今、改めて私は日々を味わう心を保ちながら歩みたい——と願っている。最後に、俳人である佐藤氏が本書に引用した自作の句で最も心に残った二句を紹介してペンを置きたい。

神謡集の稿に肉声聞く霜夜

賢治の忌見えぬ手紙を渡す旅

とんぼの輪

対話

今年の一月に、横浜本牧のローカルラジオにゲスト出演した。詩の番組である。放送をまだ私自身が聴けていないので、どんな風に話していたのかわからないが、新鮮な経験であった。話したことは、普段の詩の作り方、詩編『世界にあるもの』の合唱曲も流してもらった。MCで詩人でもある中村剛彦さんから、茨木の子さんについての話をふられたとき、茨木さんが大切にしていた詩の対話性についてすこし話した。茨木さんが発行していた有名な同人誌「權」のメンバーの大岡信さんも対話の必要性について常々語られていたし、長年連載された朝日新聞の「折々のうた」も大岡さんにとつては、読者との対話であったのではないかと察する。では、いまの詩壇の現状をみるとどうだろうか。この対話性が引き継がれているだろう

か。疑問を感じることも多い。モノローグな詩が多すぎて、詩があたかも詩人のためだけにあり、詩と市井の人との関係性はかけ離れていくばかりに映る。詩壇の受賞作品などをみても魅力を感じるものは多くない。それが、わたしが詩壇から距離を置いている一因ともなっているのだが。もちろん、詩と自分の位置を作者自身が決めるのは自由であるし、モノローグ性の詩を書くのもいい。けれど、詩のダイアローグ性が、市井の人々へ詩を身近にさせるための必要条件であるし、もつと詩が読まれるために忘れてはならない核であるところづく感じる。

(市川)

昨今の私の誤解など

。韓国で流行しているからソウルフードかと思っていた。

。桜田さん一家がバルセロナに移住し総出で作ったのがサクラダファミリアなのか、思っていた。

。知友の銀座に住む会田さんが「ア

イダ」を好きかどうかは わからないが。

。原さんという碁友が二人もいるが、「マタハラ」「セクハラ」「パワハラ」「カスハラ」という語には、ハラハラドキドキもせず、でもそう快い響きを感じないでしょう。それにしても両足の間部分、股がマタニティに通じていることがなんとも不思議な偶然だ。

。奇妙といえば中国語でアメリカが「美国」とは漢字圏の我々にしか通じないジョーク、皮肉だろう。

。餓死を連想させる「ガ」と黙ってみているしかない座視の「ザ」このカタカナが繋がる旧約聖書からの地区、これも漢字圏の我々にしか通じない哀しみか。

。200年後か日本人の姓が全員佐藤になるといふ。下野の国(現・栃木県など)佐野の藤原氏が佐藤の始まりだといふ。私も確かに年賀状に5人の佐藤さん!このジョークを真に受けると鈴木・斎藤・高橋さんは何処に行ってしまうのか。(耕太郎)

甲州市勝沼紀行

勝沼ぶどう郷駅に降りると大勢の人の波がホームから改札へと続く。駅前で午前十時に友人達と待ち合わせた。コロナ禍で訪れられなかった約五年ぶりの勝沼である。この日二〇二三年十月七日は年に一度の勝沼ぶどう祭りの日である。待ち合わせたメンバー、三名は勝沼在住の陽子さん、東京の小林君、私、中学校の同期生である。陽子さんが運転する車に同乗し、陽子さんの自宅で陽子さんの夫、一氏と会う。二人共数度面識があり四人で会場に向った。会場の中央公園まで徒歩五分程度である。入るとすでに多くの人が並んでいる。目当てはワインの試飲である。受付でワインの試飲券とグラスを受け取る。グラスは勝沼公認のグラスであり、以前から欲しかったグラスであった。出店二十四ワイナリー、山梨県甲州市からこの日に集

まったワイナリーである。如何にこのイベントが大切であるか各ワイナリーの気概が感じられる。四人で試飲して回る。同じ葡萄で醸造したワインでもワイナリーごとに味は異なっている。また醸造年によっても違いが出てくる。自分の好みの味を見出す所に試飲の醍醐味が存在する。天気は快晴、夏のような暑さであった。私たちは、試飲を一休みして木陰の花壇に座り、涼を取り、生ビールを飲みながら昔話や現状について語り合った。話は尽きないが会場に戻る。一氏が山の中腹に見えている鳥居について説明してくれた。「夜七時になるとあの鳥居に火をつけ、花火も同時に打上げ、祭りはクライマックスとなります。鳥居は地元の高校生やボランティアが木をひとつひとつ手渡しで運んで鳥居の形にしています」一氏自身も昔はよく参加したと言う。「来年は夜も居られるように日程を組んだらいいで

しよう」と言われた。

ワインの試飲は終了し、一氏が懇意にしているワイナリーに向うが、陽子さん小林君は、荷物を取りに陽子さんの自宅へ、一氏と私はワイナリーの大泉葡萄酒へ向った。入ると試飲場所にはテーブル代わりに縦置きワイン樽が四つ置かれていた。担当者がワイングラスを持ってきて赤ワインを注いで「此処では、赤ワインを地酒と呼んでいます」と言う。ボトルのラベルには『地酒』と表示されている。一氏、私はワインを飲みながら担当者と言義を暫くしていると、陽子さん、小林君がきた。小林君は説明を受け、『地酒』一升瓶を購入した。大泉葡萄酒から徒歩十分のバス停留場に四人で行き、小林君と私はバスに乗り、一氏、陽子さんに見送られ十四時二十分名残惜しくも会場を後に。二人の手にあるのは陽子さんから一籠の葡萄の土産であり、感謝である。(妙園)

美(大きな羊)の今昔

—現代における「詩」とは—

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。世界も人生も川の流れのごとく流転しつづけます。同じ川に二度足を踏み入れることが出来ないように、言葉や文字、その指し示すものも常に変化し続けます。人類最初の文字の使用は、人間と神とのコミュニケーションの道具としてでした(白川静)。その時代、「美」、「真理」、「善悪」、「人間とは何か」という疑問に答えられるのは唯一人、世界を創造した神だけでした。花鳥風月、自然の中に美があるとすれば、その美の背後には、その自然を作った造物主の存在や意志が反映されているはず。「真理」や「美」や「善悪」の判断は神の側にあるはずでした。そして近代、「…或る詩的領域が文学的に存在していて、その神火を世代

と共に新しく継ぐために試作するという態度は、新体詩発生以来連綿として超現実主義の人々にまでも厳然と遵奉されている聖地のように見える。形式の変遷にもかかわらず、この種苗は断絶していない。こういう見方からすれば私の詩は詩ではないだろう。……」(高村光太郎、「小感」(1938年)『詩生活』)。近代の「人間の発見」、新体詩の時代を経て、さらに自由な草野心平さんの詩「冬眠」や「天気」を経て「詩」の領域は益々広がって行きます。現代は、神という大きな物語のフィクション性とその限界に気づいた時代です。「美」は、自然の中の美だけでは成立せず、それを美と認める人間が必要です。つまり「美」は(神や自然の側の問題ではなく)人間の側の認識の問題です。仏話の「群盲象を評す」の象をより詳しく見て触れるためには、「美」を判断するために使っていた「神」という余計な

道具を省略し、自然の中の人間という新しい大きな物語を構築する必要がありました。そうすることで、「美」をより深く広く正しく捉える可能性が出てきます。現代における「詩」や「芸術」の本質も同じです。「詩」や「芸術」の本質は、「見えるものをみたとおりに表現するのではなく、見えていないもの(先述の仏話の「象」)をいかにより優れた形で表現するか」。「詩」の本質は、「言葉では決して表すことのできない人間にとつて大切な情緒がそこに存在していることを、言葉を使って、音や空間を使って、数を使って、あらゆる手段を使って、指し示したもの」です。現代における、発明・発見の本質(まだ形に現れていなかったものを形にする)と同じです。つまり、科学者、芸術家、数学者、あらゆる文化の最先端で未踏の領域を切り拓く人達はみな現代の「詩人」の定義に当てはまっているのです。(北川)

最も大切な物は朽ちやすい

アトリエに入ると、いつも身を引き締める思いになる。ここが光太郎が十和田湖に佇む「乙女の像」の塑像を作った所かと。正面に大きな窓があり光がさしている。左の隅に光太郎の大きな写真が立て掛けてある。周りには美術の書籍が戦前のも含め所狭しと並べられている。不思議な空間である。

利一郎さんはいつも穏やかな表情で待ってくれていた。すぐに冷蔵庫からビールを取り出し勧める。ほろ酔い加減になると、自分の身の上話を始める。イサム・ノグチが住んでいた頃、よく山口淑子が訪ねてきたこと。淑子さんの弟と仲良くなり、ジョンウエインの「駅馬車」を観に銀座に連れて行ってもらったこと。中学生の頃、高村光太郎が来た時のこと。四年後、亡くなった日のこと。そんな話の中でこのアトリエに対す

る人一倍強い愛情が感じられた。

利一郎さんは日本の水彩画の父と言われた中西利雄の長男である。父は戦前パリで学び日展で特選も取っている。パリで展覧会も開かれた。日本の学校の図画工作や美術教育に多大な影響を与えている。

ある日の事、利一郎さんから伊豆半島にある別荘に行かないかと誘われた。他の理由は、別荘の周りの樹木を伐採してほしいというのである。

早速、Kさんと現地に向かい利一郎さん、電気屋のHさんと合流した。二泊三日の旅は楽しかった。Hさんはレンタルで借りた中型のクレーン車を操り、慣れた手つきで樹木を伐採していった。夜は近くの馴染みの居酒屋に連れて行ってくれた。目の前には伊豆の海で取れた新鮮な海の幸が舟盛りで並んだ。その後、顔の効くカラオケで深夜まで飲んで歌った。朝は小鳥のさえずりで起こされた。周りは見渡す限りの緑で覆われ

ていた。遠くに太平洋が望めた。こんな清々しい気持ちになったのは久しぶりだった。その数年後、この別荘は処分されたと聞いた。

このアトリエには様々な人々が交错している。光太郎やイサム・ノグチだけでなく、草野心平、佐藤春夫、武者小路実篤など。乙女の像は、太宰治の兄、当時青森県知事だった津島文治が依頼したものだ。津島は弟を心配し佐藤春夫に相談した。佐藤の兄は医者をやっており、太宰治の治療に当たったときもあったという。利一郎さんは昨年一月亡くなった。彼はなぜこれほどまでにこのアトリエにこだわったのだろうか。戦後、私たちは物質的に豊かになってきた。しかし、大切な何かを失くしてきたのではないかと思う。主のいないアトリエは寂しい。この場に立ちながら、「本当に大切なものは何だろうか」「このアトリエを残せないだろうか」と思案する日々である。(曾我)

読者の輪 (17号より)

- ★「アグラの誓い」このように生きる日本人がいることに感動しました。献身的につくす姿にマザーテレサと同じ清らかさを感じました。(U)
- ★最後に和音が感染してしまおう手紙で、胸を突かれました。ガンジーがインドからライ患者を救い出そうとした気持ちがありました。(S)
- ★「アグラの誓い」は感動的な小説でした。多くの人に読んでほしいし学校にも置いてほしい。(S)
- ★東尾さん、「風わたり」。何度も読めば読むほど味わい深い詩である。故郷を吹く風の中に作者は愛する父や母を語っている。作者の代表作にふさわしい詩である。(R)
- ★北川さん。「人間の一步」毎日生きているとき少しだけいいことを玉のようにつないで行けたら小さな一歩だと思った。(A)
- ★妙圓蘭さんの「四尾連湖にあそぶ」は名エッセイです。霧に煙る湖面が脳裏に浮かびこの地上の楽園に是非訪れたいものだと思います。(T)
- ★葉山さん。「澄んだ湖」。人間の尊

- 厳とは人の思い通りにされないことだ。湖みたいに澄んでいるおじいさんの心を持ちたいものだ。(S)
- ★マエキさん。「母性の剣」は命の誕生と言う母性の本性と人類の戦争などの愚かさを表現している。その手にペンを！そして産声を上げよ。母性の強さを改めて知らされた。(I)
- ★市川さん「稲のうた」。花巻の一面の緑の絨毯が浮かぶ。稲の成長や稲が人間にもたらす生命の輝くことの意味をしっかりと提示している。(N)
- ★磯田さん「女に生まれて」舞台朗読の作。親子や親族の血縁も月日と共に忘れられていく。自分で自分を褒め、ゴーイングマイウェイとしてまとめているのが小気味いい。(I)
- ★宮田さん。「もう一度の夏」夏の日々の別れの切なさ惜別の苦さが過不足なく捉えられている。立原道造の詩を彷彿させる詩である。(N)
- ★連翹忌通信。光太郎は書家でもあった。今回は小山氏が無駄足を覚悟で「佐野修三墓」を岩手東和町に訪ねて、その墓を発見。もう一つの光太郎の足跡が分かった。(O)
- ★近藤さん「おちようしもの」。海水や波のメタファーでしょうか。海の

短 信

- 現象をおちようしものとは表象するテクニクはとても面白い。(N)
- ★服部さんの「風の伝言」。「人間とは人が門に入り、日をみつめ、向こうの道へ歩いていくこと。」風の詩人の囁きが心に残る。(T)
- ★曾我さん、「帰郷」などの作品は今までの作風と違いびっくり。五十年ほど前の曾我さんに会えた。(K)
- ▼高村光太郎を偲ぶ第68回連翹忌が四月二日、日比谷公園松本楼で開かれた。全国から八十名近くが集い、次年度の再会を誓った。
- ▼新刊書籍を刊行。佐藤暎二著「四季に寄り添う」小B六版1000円。「中野・中西家と光太郎」文・勝畑耕一、監修・小山弘明。B5版400円(どちらも消費税、送料別)注文は文治堂書店まで。
- ▼今号より表紙絵を裏表紙にも用います。
- ▼今号から諸事情により六〇〇円に改定させていただきます。

(編集部)

編集後記

還暦を過ぎて変わったことと言えど同期会などを行うようになったことだ。元の職場の同僚とも年に一度会うようになった。何を話すわけでもない。気の合う者同士、会うのは楽しい。

秋田の片田舎から東京に出てきて、中学校の同窓会も還暦過ぎから始まった。社会の第一線を離れた心の余裕ができたからだろう。職種は様々。建設会社、新聞記者、石油、電気、銀行、看護師、役所、パレル、パート等…。一方主婦もいれば、手に職を持ち、いまだに現役で働いている者もある。この同窓会にいて心地いいのは、出世も、金も、名譽も全く関係ないことである。

会った瞬間、すぐに五十年以上前にタイムスリップする。十五歳から記憶は成長していないのだ。

話は自分の武勇伝でも家族の自慢話でもない。ほとんどは臍氣ながら記憶にある学校時代の話だ。怖い教師に怒られたり、クラスの子に恋心を持った話など……。この手の話は、もう時効というよりは自分自身も賞味期限切れ寸前なので無礼講というべきか……。

当時の何気ない話や失敗談などを面白おかしく話はずむが、毎年また同じ話だ。しかし同じ話なのだが飽きることはない。

人間の記憶曲線は十五歳がピークに、その後死ぬまで下がっていくという。なるほどあの頃の記憶は結構鮮明に覚えている。

今年もまたみんなに会う日が来た。これからは人数が減ることはあっても増えることはないだろう。先のこととはあまり考えず、みんなで美味しい物を食べ、旨いお酒を飲もうと思っている。

(桶屋風太郎)

とんぼ 第18号

発行 2024年6月10日

編集者 曾我貢誠

表紙 種川とみ子

発行者 勝畑耕一

発行所 文治堂書店

〒167-0021 杉並区井草2-24-15

E-mail: bunchi@pop06.odn.ne.jp

https://bunchido.jp/

D T P 具羅夢

印刷製本 有限会社 ワードウェブ

林英利

〒142-0062 品川区小山4-5-5

安川定男

四六判 二三〇頁
二、六〇〇円

詩と音楽

白秋、朔太郎の韻律を分析、ドビュッシー、ラヴェルを通じて詩と音楽との係わりを追究する。齋藤磯雄、高田博厚、山崎栄治らの良き師友に囲まれ、名ピアノリストの妻との語らいの中で、著書は豊かな音楽的思考を培った。

秋山賢司

B6判 二〇〇頁
一、二〇〇円

碁の句——春夏秋冬——

碁の背後にはさまざまな文化的文芸的な厚みがあります。俳句がそのいい例でしょう。ほかにこんな素晴らしい知的ゲームは考えられません。本書を多くの方にお勧めするゆえんです。
(大竹英雄名誉基聖)

吉田邦郎

忘れられた宗教哲学者

斎木仙酔

四六判 四二〇頁
三、五〇〇円

古今の宗教・哲学・詩歌・文学を包括し、独自の世界観を目指した斎木仙酔(一八八〇—一九三三)の評伝。仙酔の孫である著者、六〇〇枚の労作。年譜・書誌・四百人超の人名索引付。

阿武千代

四六判 二二〇頁
一、三〇〇円

陸軍看護婦

戦争末期の広東、厳しい軍隊の規定にあつて、著者は赤痢、チフス、コレラ患者の伝染病棟で看護婦として従事した。波第八六〇一部隊とよばれた陸軍病院での実体験を綴る。佐藤愛子氏推薦

曾我 貢 誠 詩集

一、二二〇頁
一、二〇〇円

新刊・第二詩集

トツピン。パラリのプー

海に沈む夕日が美しいのは生命が還る「ゆりかご」だからだ
既刊・好評発売中 二〇〇頁 一、五〇〇円

学校は飯を喰うところ

秋山 清

一、五〇〇円(税込)
二五〇頁

短歌入門

誰にもできる
作歌と鑑賞

「わたしたちは自分の現代詩を書くためにも、短歌の古さと伝統的な力を知らねばならない」
詩人 秋山清 (一九〇四—一九八八) 半世紀ぶりの再刊
装幀 坂井てい

弊社の書籍は一般の書店には並びません。送料無料ですので直接の購入が便利です。定価はすべて税抜価格です。



9784938364694

ISBN978-4-938364-69-4

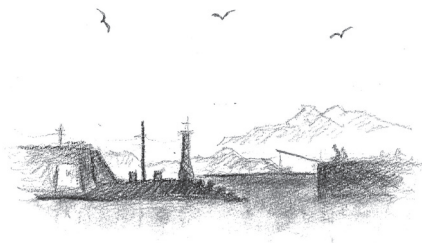
C9092¥0600E



1920095006000

定価 600円(税別)

文治堂書店



『とんぼ』創刊号より10号まで公開中
<https://bunchido.jp>・文治堂書店で検索